

トプカプ：スルタンの宮殿の説明

1686/11/10 イスタンブル

この町に住み始めて以来、宮殿で起こったことすべてに関しての真実を知りたいというあなたの望みをかなえるために、あなたに教えられるができるようにできる限りのことを行った。長い年月を宮殿で過ごし、私にたくさんの思い出を教えてくれた多くの人から情報を集めた。このためあなたにする説明がこの宮殿に入ることの困難さが許す範囲内の真実の情報であることを保障する。これが私が体験したことではないこと、私へ与えられた指示に従ったこと、そしてイスタンブルへ来てから1年間の間で信用できる人々から教えてもらったことを記したことを明らかにしておく。(p. 23 1段落)

今まで多くの人物が、宮殿の最もよく知られており希望した誰もが気軽に入ることのできる区画のことを読者たちに紹介した。他の人々は美しい場所を称え、世界に例を見ないと記した。しかし、わずかの人がしか宮廷内の部屋について少しでも記述するという危険を冒しておらず、特にこの部屋で生活するものがどのような規則や原則にしたがっているかに関しては私たちはほとんど何も知らされていない。外国でどのようなことが起こり、人々はどのような慣習で規制されているのかに興味を抱いている人々に情報を与えるために、他の人々がもう十分に語ってきたことをもう一度繰り返したりはしない。私の前に東方世界へ旅をしたものは、オスマン帝国の政治に関して思ったことを勇敢にも書き記した。しかしながら、そのことは私が彼らの後を追って彼らが語ったことを批判したり、認めたりしなくてはならないと考える理由にはならない。私の能力がこのような高度な問題を扱うには十分でないことを自覚している。(p. 23 終わり)

旅行の最中に訪問した人々の統治に関する書物に書かなかったいくつかの特徴について観察はしたけれども、私は君主たちの行動や政治に関して長々と言及できるほど無謀ではない。この問題を語れるようになるためには、私がこの年で得たものよりも多くの経験が必要である、そして隠されたものすべてを見る機会を見つけること、さらには様々な会見や、取引に関して任されているものたちでさえも、王たちの集まりにおいて役割を果たす影響力を持った人たち全てや貴族たちの荷を軽くするために使われた全ての秘密の秩序を知るためには困難を伴うのだ。私には、成功をおさめるために自分の力量にふさわしいテーマが必要である。あなたに目新しいことを知らせることや、旅人が不完全な形で言及してきたものを正しく識別できるように保障し、あなたが興味のあることを満足の行く形で提供することが私にとっては十分なことである。(p. 23 2段落)

あなたが私の手紙を届ける相手は、あなたほど外国に詳しくないので、テーマに関してし

ばらく悩んだあと善意のことを疑う恐れがある、なぜなら宮殿に入ることが不可能なことやスルタンの歓心を自由に引き出すことはできないことを皆知っているからである。さらに多くの人々の意見では、この宮殿はスルタンの愛人を囲う場所以外の何ものでもなく、彼女たちを厳しく護衛し去勢されることなしには決してなかに入れないということにされている。(p. 24 1段落)

スルタンの宮殿は他の王子の宮殿と似ている

この問題で彼らを勘違いから救いたい、そしてイスタンブルの宮殿ではだいたい他の王子たちの宮殿と似通っているということを信じてもらいたい。なぜなら、スルタンの宮殿にはすべての側近や、スルタン個人や家の手伝いをさせるためにおいている者、そして職務についているものたちとともに生活していたからである。(p. 24 2段落)

宮殿の男子は女子と離れて暮らしている

男子たちは他の国々と同じように、宮殿の女子たちと親しくすることは禁止されていたこと、女子たちが暮らしていたハレムは男子たちの暮らしているところから離れた高い塀に守られていたということは正しい。(p. 24 終わり)

結婚の自由の認められない拘束された生活を送っている男子たちは、ある階級まで出世して県知事(eyalet yönetimlerinde)を任されるまで女性たちの顔すら見ることが出来ない。(p. 24 3段落)

私が説明する場所のために使われるペルシャ語起源の“内廷(enderun)”はとても適切な名前である。ラテン語の“penetrare”と同義語のこの単語は宮殿の“内廷の人々”の部屋(daire)や部屋(oda)をあらわすと同時に、母后や他のすべての女性たちの部屋を含む区画を表す言葉である。(p. 25 1段落)

オスマン帝国の高官についているものの多くは、30～40年続く奴隷期間を終えると内廷から出る。奴隷期間の最初の7～8年は付属宮殿のひとつで新人小姓として過ごす、その後大宮廷、別の言い方では新しい宮殿(トプカプ宮殿)へ呼ばれる。トプカプ宮殿からいったん出ると müftü か宰相にならなければもう一度そこに入ることはできない。帝国内全土でこの2つの職についておりかつ重要な用事で呼び出された者でない限り内廷に入ることは許されない。(p. 25 2段落)

教師と商人は内廷に入ることができる。スルタンの教師

その代わりに内廷が用事のあるものを招くときには、白人宦官長が選び指名した教師や商人たちは知らされた定刻には内廷に入ることができる。スルタンの世話役や、世話役というよりは教師役をやっているスルタンの教師も内廷に入ることのできる一人である。主な

仕事は読み書きを教え、最重要かつトルコ人のよく使う法律や学問について教えることである。この教育はもちろんスルタンがまだ若い頃や、罰を与えられる年のころにのみ行われる。小姓を教育するためには他の教師もやってくる。トルコ人及びユダヤ人の内科医、そのほかにも外科医や音楽家、壁職人、大工、時計職人、井戸堀職人ども内廷に入ることができた。 (p. 25 3段落)

宮殿のハレムは黒人宦官長が管理していた。黒人宦官長と女性の近くに控える黒人宦官は全員マグリブ人から選ばれた。その目的は(私の考えでは)この怪物ほどまでは醜くない男の顔が女性たちを惑わせるという危険性をできる限り遠ざけるためである。 (p. 25 4段落)

男子部屋の宦官長

男子が住んでいるほかの区画は白人宦官の1人である白人宦官長が管理していた。白人宦官長は全ての小姓及び彼らとともに生活していた全ての宦官長たちの上にたつ権力を有していた。 (p. 26 1段落)

ハスオダ(Hasoda)長

白人宦官長の次に権力を持っていた宦官は以下のものである：ハスオダ長つまりハスオダにいる小姓や他の高官の長である。全ての小姓の部屋、特にビュクオダ(Büyükoda)やクチュクオダ(Küçükoda)、そして遠征部屋つまりスルタンが遠征に行く際にはいつも同行した小姓たちの部屋を管理したキャフヤー(kahya)である。小姓たちに給料や衣類を配布する仕事を請け負っていた。

宝物庫長は宝物庫で働く小姓たちの部屋で権力を持っていた。

食料庫長も同じく、食料庫とそこで働く小姓たちの部屋で権力を得ていた。

後にはビュクオダに存在したほかの職種、小姓長、副小姓長、スルタンのモスク、つまり小姓たちが礼拝を行った場所のモスク長も現れた。モスク長の次に権力を持つ2人のモスク宦官長や同じ仕事についていたほかの小姓たちも存在した、彼らはみんなビュクオダかクチュクオダに住んでいた。 (p. 26 2段落)

下士官あるいは無官位の宦官

その他の宦官たちは一切の官位は持っていなかった、彼らはただの下士官であった。その代わりに長く勤務したものは、自分よりも後から任命されたものよりも高位にあり、また宮殿の秩序に反したものや間違っただけの行為をしたものをひっぱって来て平手で打ったり、うなじを拳で殴ったりする権利を有していた。 (p. 26 3段落)

クチュクオダのキャフヤー

クチュクオダはクチュクオダのキャフヤーが管理している。この部屋にいる宦官や全ての

小姓たちの長である。
落)

(p. 26 4 段落)

白人宦官の数。白人宦官の給料

白人宦官の数は 50 人ほどである、職種によって給料に差はあった。下士官兵の日給は銀貨 12 枚もしくは 6 マングルであった、しかしいくつかの仕事に成功して手にしたものや死んだものが残した遺産、もしくは自分が所有しているいくつかのモスクの運営から得た収入も得ることができた。白人宦官長は多くのスルタンのモスクの運営から 1 日に 100 シッケ (sikke) ほど稼いでいる、これは 1 年では 219,000 リラの収入になる。 (p. 27 1 段落)

母后付きの宦官と王子付きの宦官

彼らの長が黒人宦官長である黒人宦官たちの職務は以下の通りである：母后付きの宦官は、彼の部屋の大カフヤーのようなものである、近くに控える全ての黒人宦官や女奴隷の上にたつ権力を持っていた。同時に皇后の厩舎番のキフヤーのようであった、なぜなら母后長は皇后にどこへでも同行しいつも近くに控えていたからである。 (p. 27 2 段落)

王子付きの宦官は王子を護衛する宦官である。現在スルタン・イブラヒムの 3 人の息子が生きている、彼らは王座についているスルタンの兄弟であり別の母親から生まれた。このうちの一人はスルタン・スレイマンであり、トルコ人たちは母親を亡くしたこの王子に大きな期待を寄せていた。もう 1 人はスルタン・ベヤジッドで、残る 1 人はスルタン・オルハンである。この下の 2 人の母親はまだ生きており、旧宮殿で生活している。スルタンの母親は通常ここへ送られ子供が死ぬか王座に着くまではここから出ることはできない。王子たちはスルタンの宮殿で、ずいぶん快適な監獄へ閉じ込められているかのような生活を送る。1 人ひとりに世話役として 2 人の黒人宦官と女奴隷が与えられた。イエニチェリは常に王子たちの護衛を勤めているそして最後の数年間はハンガリーへ遠征に出かけるため王子たちの護衛を 7 人へ、ムフティー、2 人のカザスケル、黒人宦官長、門番長、スルタンの教師、カイマカムへと預ける、イエニチェリ隊長は、もし自分の居ない隙にスルタンの王子が殺害されたら護衛役の者たちを殺害したことでも知られている。 (p. 27 3 段落)

皇后の宝物庫長

宝物庫長は、宝物庫で働く女子たちを管理する。

皇后の食料庫長

食料庫長は皇后の食料庫を治める

ビュクオダ長

ビュクオダ長はビュクオダを管理する。

クチュクオダ長

クチュクオダ長はクチュクオダの長である。

Başkapı Oğlanı

Başkapı oğlanı はハレムの門にいる下男である。 (p. 28 4段落)

モスク長

内廷において礼拝を行う場所を担当する2人のモスク長が居ると同様、母後の側にも帝国のモスクを管理するものが2人居る。 (p. 28 1段落)

黒人宦官長の給料

全く例を見ないような黒人宦官は白人宦官と同じ給料を得ている、しかし黒人宦官長は権力下にあるスルタンのモスクからの莫大な収益を手にできる、これらは1日に300セキンほどの収入を得ていたと考えられる、これは年間でおおよそ650,000リラになる。それに加えスルタンや王妃、スルタンの寵姫やスルタンの護衛からしばしば莫大な褒賞をもらっていた黒人宦官は常に白人宦官たちよりも多くの財産を持っていた。なぜなら彼らのそばにいつも控えており、そしてスルタンのお気に入りになること、もしくはこの地位を守り続けたいと願う女性たちの陰謀に加担するからである。この種の仲介役を努めて成功した暁には帝国の最も高い位を与えられることすらある、そして本来的には半分女の男であるにもかかわらず多くのものが軍隊の指揮をとったり、一部のものは最も大きい州を治めたりすることもあった。ここでは仕事がいつも最も相応しい者や最も才能のある者へ与えられていなかったことが理解できる。(p. 28 終わり)

他の場所でもそうであったようにトルコにおいてもこの地位には往々にして大変間接的な方法(=いんちき)で到達されており、世界のどこでもセックスの手助けをするものがいつも必要であり、かつ主人の寵愛をうけたり主人の配下に入ったりするため、主人のお気に入りである女性にある種の便宜を図り、(女性に)君主の秘密を(2人で)共有しており君主の忠誠と愛情を永遠のものとするためには(宦官の)手助けが必要だと信じ込ませるよりも効率的な方法や信用できる方法はないように見える。 (p. 28 2段落)

カフタンやドルマンを着用した小姓

小姓たちは一般的意味では2つの階級に分けられる：シルクのカフタンを着用した者たちとブロードのドルマンを着用した者たちである。毎年大祭の前にキスヴェヤカフタンを作らせるためにこの一団に十分なシルクやブロードの布が配られる。これは何色でもよかった(しかし黒のみが禁止されていた。なぜなら美しい天国でこの色は自分だけが着用できることや他のものからこのような形で差別化をはかることを推し進めた預言者ムハンマドは、ある意味で、黒色を着用することを禁止した)。スルタンも他のトルコ人も制服を着用していた。 (p. 29 1段落)

宮殿の唾者

宮殿には 50 から 60 人の唾者つまり *bi zebany* もいた。この生まれつき言葉を話せないものたちはビュクオダやクチュクオダで寝泊りしていた、しかし日中はアーラルモスクの前で座っていた。スルタンが俸給を与えるという恵みをお示しになり、宮廷から出て行った他の唾者が尋ねてくる。聾唾者言語の専門家や全てを身振りで表現できるもののために、若者と会話をして様々なおとぎ話や物語を語ったり、コーランを読んだり、預言者の名前や聾唾者言語の様々な興味深い単語を教えたりしながら彼らを教育した。 (p. 29 2 段落)

道化師役の(Musahip)唾者

8～9 人の年長の唾者がハスオダに滞在していた。彼らはムサーヒップとよばれていた、なぜならいつもスルタンと談笑し遊んでいたからである。スルタンは彼らとともに曲芸をしたり泉の水の中で飛び跳ねたりして楽しんだ。ふざけあいを楽しむと、彼らへお金やコインを投げ与えて互いに奪い合いながらお金をかき集める様子を面白がって眺めている。この気晴らしをより楽しいものにしたいと思うときには、聾唾者だけでなく小人も呼び寄せた。 (p. 29 3 段落)

小人たちも必要な訓練やスルタンへの礼儀正しく丁寧に振る舞えるように必要な期間ビュクオダやクチュクオダで滞在する。身長が小さければ小さいほど喜ばれる。特に唾者や小人であり、しかも宦官であったとしたならばより価値が与えられる。スルタンへ献上される最も珍しい贈り物はこの 3 つの素晴らしい特質を持ったものを見つけることであった。ある日前述の特徴をひとつ残らず兼ね備えた人物に出会ったときすぐさま彼に高価なカフタンを着せてスルタンや母後のムサーヒップとした。彼は宮殿のどこへでも自由に出入りすることができた。 (p. 30 1 段落)

この宮殿の部屋をもっとよく説明するために、私が提示する設計図は役立つだろう。大きさは正確ではないけれどもそれぞれの場所はこの図のなかに示されている、そしてあなたへある知識を与えることができる。この設計図は説明の順番を簡略化するので、あなたへ行う説明を秩序だったものにしてくれる。図の上へ文字や数字を記した全ての場所について語り、宮殿で生活する全ての役人の役割をあなたへ説明しよう。 (p. 30 2 段落)

トプカプ宮殿の設計図。宮殿の第2庭園

まず初めに上にある設計図に書かれた数字や文字をあなたに説明しなくてはならない。初めに、“A”の文字は宮殿の第2庭園を示している。私は第1庭園や部分的に海に面した庭園の設計図は記載していない。なぜなら宮廷の中で起こったことや宮廷の建物そのものよりも、宮廷の運営のみをあなたに説明したいからです。(p. 30 3段落)

宮殿の第1庭園

またその代わりに第1庭園がおよそ700~800歩(adım)の長さで200歩の横幅を有していることをお知らせします。そこは石畳ではなく、誰もが馬に乗って自由に入ることができる。(p. 30 4段落)

バーブ・ヒュマユン (Bab-ı Hümayun)

宮殿へと入る右側そしてアヤソフィア側の通路に面した唯一の門はとても荘厳であり、美しいモザイクを施された大きなドームがある。(p. 30 5段落)

門番。兵士は町で武器を持ち歩くことを禁じられていた。

この門を門番が、入り口では護衛部隊を勤めるイエニチェリが守っている。武器は全て壁のフックに下げられていた。なぜならトルコ人は、兵士でさえも、イスタンブルに居るときは決して武器を持ち歩くことができず、武器は己のみを守るためだけに必要であるという考えで帯刀していた。(p. 32 1段落)

スール・スルタン (Sur-ı Sultani)

宮殿の城壁はとても長く高いものである。上部には銃眼が備えられ、海側からも町側からも宮殿の全方位を囲っている。およそ1フェルサーフ (fersah)ほどの長さのこの城壁の巨大さは町を含有できるほど広く、広場を取り囲んでいる。(p. 32 2段落)

宮殿の広場もしくは周辺

城壁の中の空間がこれほどまで広いということに驚いてはいけませんよ、なぜならスルタンの家は使用人全員が住むのに十分な土地を確保しなくてはならず、さらに実際に広大な区画を庭園が占めていたのですから。(p. 32 3段落)

宮殿の第2庭園に入る者

順番がきたら言及するつもりで63と番号を記した門を通過して入場する“A”という番号をふった第2庭園は、ディヴァン・メイダヌ (Divan maydanı)である。ループルで王子や公爵の馬車のみが入ることを許可されているのと同じように、この庭園にはスルタンが人々の前に姿を現すときに彼の後ろをついてくるハスオダの上位3人の小姓、パシャたち

や大使のほかは誰も入ることができない。この庭園は正方形で、長さは 200～300 歩であり、最初から最後までアーチがついた回廊で囲まれている。真ん中には木の陰の中にある美しい泉がある。あなたへ裁判やディヴァーン (Divan) の審理の様子についてはここでは語りません。この話題は 45 と 46 の番号の説明までとっておきます。 (p. 32 4 段落)

バーブ・ヒュマユン

“1” の番号はディヴァーン庭園の外〔第 1 庭園〕に面した門、つまりバーブ・ヒュマユンを示している。 (p. 32 5 段落)

バービュッサーデ長(Babüsaade ağaları),ディヴァーン会議

この門の前で宦官長たちとともに白人宦官長は待機し、他の巻き毛のバルタジュ(zülüflü baltacı)たちはそれぞれの部屋にて待機する。ディヴァーン・ヒュマユン(Divan-ı Hümayun)の集まりでは(ディヴァーン・ヒュマユンでは週 4 日、つまり金曜日、日曜日、月曜日、火曜日に日の出から午前 10～11 時まで裁判を行う)、宦官や下士官兵のすべての宦官長は非武装で門にて待機する。しかし 42 と 43 の番号の部屋では大使がスルタンの御前に招かれるときに限り、全ての宦官がスルタンの命が狙われることのないようカフタンの下に短剣を隠し持っていた。 (p. 33 1 段落)

バービュッサーデ (Babüssaade)

この門の正面では朝から午後 11 時まで 10 人の巻き毛のバルタジュ(zülüflü baltacı)が任務についている。手をへその上で組んだ状態で立ち、裁判が開かれる日に任務に就く数は 30 人にもなる。時にはもっと大勢いることもある。男児の部屋〔内廷(Enderun)〕へ入るにはこの門を通過する。

“2” の数字は黒人宦官長の門である。女性たちの部屋〔ハレム〕へ入るにはこの門を通過する。門の手前では黒人宦官長と役人が待機し、彼らの前で白人宦官長のいる〔バービュッサーデ〕まで巻き毛のバルタジュが同じように任務についている。 (p. 33 2 段落)

白人宦官長と任務

“3” の番号は白人宦官長の部屋である。ここで寝泊りし食事をする。門のすぐ近くで生活しており主な仕事は門を守ることである。宮殿の最高位の宦官でありスルタンの家のキャプチャー長のようなものである。政府を絶対的な権力で支配しており黒人宦官もそうでない者も皆彼の権力下にある。 (p. 33 3 段落)

小姓のビュユクオダ

“4” の番号はビュユクオダと名づけられた小姓たちの部屋である。ここで 300～400 人ほどのドルマンを着て黄色い靴やブーツを履いた小姓が生活している。頭には銀糸の刺繍を

施されたキュラフ(külâh)をかぶっている。顔の両側、耳の近くに残されたそれぞれの巻き毛の下にある髪を切っている。宮殿で働くほかの全ての小姓もこの巻き毛をつけていた。(p. 33 終わり)

小姓がこの姿でいる慣習は、スルタンへ永久に奴隷の様に仕えるということを思い起こさせるために持ち込まれた。(p. 33 4段落)

ユスフ、スルタンの小姓の守護聖人

エジプトのファラオの“小姓”であったユスフもその頭に巻き毛があったと信じられていたので、彼を守護聖人として受け入れている。

“5”の数字はビュクオダの後ろの門である。ここはクムカプス(Kum kapısı)とよばれている。日中は閉じられているこの門は、夕方職務についているものたちがクチュクオダの門やここを歩いていけるようにと一晩中開放している。“7”の数字について：この門の前でビュクオダやクチュクオダそれぞれの小姓は、前述の2つの部屋の真ん中や扉で燃え続けている大きなろうそくの芯を切るために手にろうそくの芯切りバサミを持って任務につく。(彼らは)寝ている小姓たちから1人が毛布をはがしてしまったら行って覆いかけてやり、起こりうるあらゆる種類の事故を防ぐために待機している。(p. 34 1段落)

小姓たちのクチュクオダ

“6”の数字はクチュクオダである。ここには150から200人の小姓がいた。“4”で表したビュクオダの者たちと同じ様なものを着用している。ビュクオダの者たちとの唯一の違いは、部屋の宦官たちやビュクオダの下士官兵とともに白人宦官長の食卓に残ったものを食べる。なぜなら宦官は全員管理している部屋で食事をするからだ。クチュクオダの小姓は全ての白人宦官や黒人宦官、その他の全ての小姓たちとともに(ビュクオダの者は除く)スルタンのモスクにて礼拝をする。(p. 34 2段落)

小姓の節度

モスクへ入るときに小姓たちが2人ずつ伏し目がちに手をへその前で組んだ状態で、敬服したようすで歩くのを見ると感嘆の念を起こす。“7”の数字はクチュクオダの後門である。これもビュクオダのクム・カプスと同じ機能をもち同じ方法で守られている。

(p. 34 3段落)

宮殿の女性の仕事、布への刺繍

“8”の数字は女性たちの大部屋〔女奴隷部屋(Cariyeler Dairesi)〕である。ここは女性たちが洗濯物を乾かすために広げたBの内廷すなわち〔女性たちの広場(Cariyeler Taşlığı)〕が広がっている。(p. 34 終わり)

この女性たちは仕事の時間になると綿の布の上に金や絹の刺繍を施しながらハンカチや頭

に巻くターバンを作る。

(p. 34 4段落)

“9”の数字は黒人宦官長の部屋である。ここで寝泊りし食事をする。白人宦官長がスルタンの部屋のカフヤー長の地位についているのと同じように、黒人宦官長もハレムの全黒人宦官を支配している。母后やスルタンの寵姫(スルタンの子を産んだもの)、スルタンのほかの寵姫に仕えている女奴隷への権力も持っている。黒人宦官長は白人宦官長よりも権力がある。なぜなら収入も多くこの仕事はスルタンへより簡単に近づくことができ、さらにいつでも寵姫とともに現れることでさえも、スルタンの歓心を得ることが可能であるからである。帝国の仕事のもっとも優位なところはこの宦官たちが得ている、そしてとても若くして宮殿に入ったものはおそらく一度も宮殿から出ることはできない、しかし政府の利益について考えを述べて人々の恩恵や恩寵から利益を得る可能性がある。帝国の最高位についているものたちは、スルタンの歓心を得て彼の前に歩み出るために、この宦官たちに大量の金銭や贈り物をするを余儀なくされた。特にスルタンに対して彼が何をしたいのかを聞き、女性たちを使って望むことに関してスルタンを説得することができるために大きな可能性を持っている黒人宦官は、ほとんどあらゆるものの所有者となる。彼のことを疑うもの、彼の取り計らいを頼まないものたちの首を簡単にはねることもできる。

(p. 35 1段落)

清め。清めは罪を拭う

“10”は小姓や宦官が洗濯をしたり清めを行ったりする場所である。清めは顔や腕、足を洗うことであり、グシュル とよばれる清めは体全体を洗うことである。トルコ人はこの清めとともに行った全ての罪が拭われることや、犯した罪を本当に後悔しているならばアッラーはこれ以上の償いは求めてはいないことなどを信じている。このため自分の体を洗うようにアッラーが魂を洗って浄化させてくれるよう儀式で祈りながら清めを行う。

(p. 35 2段落)

清めとは何か、またいつ行うか

毎朝そして礼拝の前に清めを行う。この手順はモスクへ入るのに適した状態へなるためにとられる方法であり、礼拝を行う準備である。我々が罪という名を与えた平凡かつ重大でない罪を拭うためにはこの儀式で十分であると主張されている。

(p. 35 3段落)

全身の清め(グシュル)とは何か、またいつ行うか

しかしいくつかの大罪を犯したときや夜に知ると知らずと不浄を犯したときに許しを請うために全身を洗う必要がある。さらに結婚しているものは夫としての勤めを果たしたときには全身の清めを行うことが強要される。しかし夫婦たちには以下のような特権がある。妻の側から全く離れず4日間家で過ごしたのものや、彼女に有名なエチオピア王の全ての美

徳を示し満足させたときは、この期間の間たった一度だけしか不浄にならないとされる。

(p. 36 1段落)

清浄はユダヤ人から取った

彼らの偽りの預言者(ムハンマド)はこの種の清めと前述の手順を、とてもよく知られているユダヤ教の法からとった。メッカにてこの国民とともに生活することになった後に、悪の教義(コーラン)をこの種の儀式で満たし、いくつかの肉を食べることを禁止し、他のものを食べることを許可した。

“11”の数字はEの庭園に面するクチュクオダの門である。この門は基本的に一日中開放されている、そして日が沈んだのち1時間半後に小姓たちは夜の礼拝と名づけられた最後の礼拝を行いモスクから戻ってきたときに閉じられる。

(p. 36 2段落)

バービュッサードの向かいの門

“12”の数字は大庭園、アルズオダス(Arzodasi)の前へ開かれたスルタンの門の向かいにある大門である。

“13”の数字はFの庭園に面したビュクオダの門である。一日中開かれていて、日が沈んだときに閉じられる。

(p. 36 3段落)

小姓は1日に5回礼拝を行う

前述の部屋の小姓たちは彼ら専用のモスクで礼拝を行うために日に4回この門を通る。5回目の礼拝は彼らの部屋で行う。

(p. 36 4段落)

宮殿のカフヤーの部屋。小姓たちの異なる給料。

“14”の数字は宮殿のキャフヤーや宮殿のケトゥフダー (kethüda)である宦官の部屋である。他の宦官や全ての小姓は3ヵ月ごとの給料〔ulufe〕を取りにこの部屋へ来る。ドルマンを着用した小姓は日給銀貨8枚、カフタンを着用したものは銀貨12枚、ハスオダで仕えているものは銀貨40枚で計算される。

(p. 37 1段落)

小姓の最初の教育

宮殿の小姓として認めてもらうため、そして最初のステップとしてビュクオダやクチュクオダに入るために、外にある3つの宮殿すなわちエディルネ宮、ガラタのペラ宮、競馬場 (At Meydanı)のイブラヒムパシヤ宮で最初の教育を受ける。

(p. 37 2段落)

競馬場 [At Meydanı]

ローマ皇帝・セビリウスが作ったこの競馬場は、競馬を行うために使われた大きな広場である。このためトルコ人たちはここへ At Meydanı という名を与えた。昔はもっと広がった

この広場の一部は後に新しいモスクが建設された。小姓たちの最初の教育は7～8年続く、この期間の後に全員3つの宮から外へ出される。(p. 37 3段落)

小姓たちのチュクマ

小姓たちが付属宮殿から離れることにチュクマという名が与えられている。付属宮殿で新たな志願者を教育したり規則や慣習を教えたりするために何人かの小姓はザービトゥ(zabit)〔お目付け役 (başeski)〕としてそのまま付属宮殿で採用される。付属宮殿の外へ出たものはスィパーヒー(sipahi)とよばれる。(p. 37 4段落)

シパーヒーとイエニチェリの衝突

しかしこのようなチュクマはスルタン・イブラヒムの暗殺直後に行われたものが最後となる。最後にチュクマした小姓たちは新たなスィパーヒーとして、以前からの〔カプクル〕騎兵と一体となりスルタンの死へ復讐をすることを決意し、この死の原因となったイエニチェリに対して反乱を起こした。不仲は両者で拡大し At Meydanı で抗争が始まった、しかし衝突はスィパーヒーに不利な方向へと向かった。(p. 37 終わり)

なぜならイエニチェリは小火器を有し、さらに広場に面した家を掌握してそこから銃を放ち、弓矢や槍、刀しか持っていないスィパーヒーに大打撃を与えたからである。この大虐殺のなかスィパーヒーたちは敗走しスルタン・アフメットジャミイの中に逃げ込むほかなかった。大半はその場や、モスクの中や庭園で首を絞められ殺された。(p. 37 5段落)

宮殿出身のパシャやベイレルベイ(Beylerbeyi)。宮殿での昇進

この暴動によって、このように付属宮殿から集団でチュクマするのを防ぐためにある勅令が下された。そしてパシャやベイレルベイという称号の与えられた宮廷のメンバーが自分の側近を組織するためにのみ、白人宦官長が指名してスルタンが認めた一定数の小姓とともにチュクマすることが定められた。これらの空席は、下層の部屋から上の部屋に向かって昇進が行われて埋められる。ビュクオダやクチュクオダを離れ上の地位へ昇進した者の場所を埋める数の小姓志願者は、前述の3つの宮からトプカプ宮殿へ送られてくる。付属宮殿でも出て行った者たちの数だけ新人小姓を確保する。(p. 38 1段落)

宮殿に入ったキリスト教徒奴隷

付属宮殿で認められこのように一步一步昇進していくこの新人小姓たちの大半は、スルタンの軍隊が海や大地で捕らえてきて奴隷としたキリスト教徒の戦争捕虜である。宮殿にはあらゆる民族の人々がいるが、ヨーロッパのトルコから遠い地域から来たものは少なく、ロシアやモスクワ側から(タタールたちはしばしばここへ侵入を企て彼らの前に現れる全員を連れ去っている)連れてきた奴隷がより多く見受けられる。(p. 38 2段落)

デヴシルメの子供たち。デヴシルメはどのように選ばれ連れて来られるのか？

とはいえ、大部分はオスマン帝国領内のキリスト教徒のなかから連れて来る。スルタンはしばしばデヴシルメ長を派遣し彼らから残酷な税を取る。3人の子供につき1人をデヴシルメした。いつも地域のもっとも美しくもっとも健康な10歳から18,20歳までの男の子を選ぶ。もしかしたらデヴシルメ長が来たときに、全家庭が子供を見つけられないようにうまく隠したとお考えかもしれない。(p. 38 終わり)

創造主も宗教もこれを求めている。なぜなら父親の手から息子をもう一目見たいという願いを残さず奪ってしまうことがどれほど悲しいかということと同じくらい、善良なキリスト教徒の清浄で潔癖な魂をムスリムの罪で汚すために奪われるのを傍観することはつらいものだからだ。しかしキリスト教徒の臣民はこのような場合でもスルタンの命令に背くことができず、最小の嘘に頼るものたちに与えられるであろう罰を非常に怯えてこの危険を冒すものはごく少数である。司教や村の聖職者たちは洗礼や結婚記録や死亡者の戸籍を提出し、これらが本物であると宣誓させられている。この宣誓が嘘であった場合は死刑に処される。このようにしてスルタンの使いのものは町や村のどれほどの子供がいるかを完全に把握しているのである。高圧的で無慈悲な代理人は一家に子供がいるかどうか、子沢山かどうかを自分たちで目にもっとも屈強でもっとも見目麗しい者たちをためらいもなくかき集める。一方、もし父親に8人や10人息子がいればいくら若かったとしても(一定の年に達しているという条件で)そのなかのたった一人のみを連れ去ることにするという特権を与え、結婚しているものは決してデヴシルメしない。このため若者たちはとても幼くして結婚してスルタンの奴隷となることから逃れるために、聖なる結婚の鎖によって一結婚がもたらす喜びや悲しみを全く理解できる前に一結ばれる。しかしトルコ人が彼らに保障したこの自由は他方ではトルコ人のためにもなっていた。なぜならこの早すぎる結婚は短期間のうちに彼らが強硬な悪事を働くことができるような新しい子どもたちを提供するからだ。より成熟した年をむかえる前に大家族の負担を引き受ける若者を両親の腕から引き離す。もっとも金持ちな者は貪欲なデヴシルメ長の厳格な調査を他の方向へと向けさせるような贈り物をするによって、しばしばこの不当な義務から逃げ出す方法を見出した。この義務は通常3年に一度、スルタンが使用人が必要だと考えたときに帝国のキリスト教徒の民が生活している全ての地域で行われる。必要な人数の使用人がいるときにはデヴシルメは延期された。(p. 38 3段落)

アルメニア教徒はデヴシルメを免除されていた。その理由。

アルメニア教徒は、その信仰がネストリウス派のものに似ているキリスト教徒に対してムハンマドがお示しになられた恩情ゆえに、義務を免除される。ムハンマドは彼らがイエスの神性を決して認めなかったために、ネストリウス派がもっとも純粋なキリスト教徒であると言ったのである。(p. 39 1段落)

アルメニア教徒やネストリウス派たちの信仰

セルギウス(Sergius)、すなわち偽の預言者が彼の定めた有害の諸法を学んだその哀れな神父は、このネストリウス派を異端の病気とみなされたために僧院を去りコンスタンティノープルからアラビアへと逃げた。そこでムハンマドと面会し、彼がコーランを書く際に使用した我々の聖書の文句の一部を教えた。アルメニア教徒は、前述の神父を尊敬していたおかげでこの特権を与えられギリシャ正教徒や他のキリスト教徒たちより優遇された。同時に彼らは厳しい断食を行うといったような生活を行っている。(p. 40 1段落)

ユダヤ教徒はデヴシルメを免除される。この理由。

ユダヤ教徒のこの義務を免除される。どうして彼らがこの義務から逃れているか調べたときに、ユダヤ人たちがいかなる義務も果たさないほど悪徳で自分たちの分け前に対して商売の才能で補うという習慣のこと以外は何も考えていないという理由以外私に示されることはなかった。(p. 40 2段落)

トルコで軽蔑されているユダヤ教徒たち

目を開けてメシアの光を見たくないこの盲目の人民たちは、彼らの信仰によると地上にはいかなる王も存在しないために、ヨーロッパのほかの地域と同じようにトルコにおいても完全に保護のない、不法で放浪者のような生活をする軽蔑の対象であった。あらゆるところで人々のあざけりの対象となり、それほどまでに愚かで彼らの魂は弱いものであったので、彼らの手には自身の身を守る道具は言葉以外には何も持たなかった。ユダヤ教徒たちは自分たちを侮辱するものたちよりも力があれば、罵りのほかに攻撃を試みる。もし自分のほうが弱ければただ足と涙の助けを借りる。内気さは全ての人の顔に表れ、一瞬で表面に現れざるを得ない特徴から推測することにより、顔や振る舞いから簡単に見分けることができる。(p. 40 終わり)

私が説明しようとしている本題から離れてしまったとか、これ以上脱線したら再び宮殿の話に導くことが困難になるとは思いません。スルタンの家の人々を構成している多くの奴隷たちがどこから見つけられてくるのかを説明することはこの話題から外れてはいないでしょう。さて話を元に戻したならば、このデヴシルメは子供たちをイスタンブルへ連れて来て、道中疲れたときに何日か休んだ後に連行してきた子供たちのなかで最も整った容姿を持つものをスルタンに見せる。他のものは日給銀貨 1.5 枚で土の運搬や建築の仕事に就く。つつましい生活を送るこのデヴシルメたちをアジェミオーラン(新人小姓)と呼んだ。

(p. 40 3段落)

新人小姓たち

仕事に慣れ武器を持ち歩くようになった者というのは、あらゆる種類の肉体労働に従事さ

せられた。幾人かは船の操縦や船乗りとしての技術を学ぶためにこぎ船へ、幾人かは造船所へまた幾人かは庭園へと送られる。哀れなキリスト教徒たちはムスリムへ無理やり改宗し割礼をされた後、短期間でトルコ人よりもさらに凶悪で不誠実な人間となり、自分の出生を忘れる。宮殿へ入ることを認められたものは、用意された仕事を行った後に認められ、マナーやこのために必要な教育を与えて育成される。この仕事の行うものの中で生まれつきトルコ人であるものは極少数である、なぜならこの改宗したキリスト教徒たちのほうが忠誠をもってスルタンに仕えるからである。彼らには家族も行く場所も親族も友人もいなかった。スルトンの親切心、善意以外はいかなる保護も望むことができなかった、しかし本当のトルコ人の場合こうはいかない。実際歴史はスルトンのこの考えが間違っていなかったということ、トルコ人たちとは正反対に改宗したキリスト教徒たちがスルタンにもっとも忠誠心を示したことを証明しているのである。スルタンへの奉仕にこのように腐心している者たちは、可能であればそして千の命があれば千を、スルタン個人を守るためそして帝国の拡大のために命を投げ出す。生まれつきトルコ人であるものたちはカプクルとなるので、このような道を歩むことから締め出された。そのため宮殿の高官、友人たちの子供をキリスト教徒またはデヴシルメと偽って紹介しなくてはならなかった。この子供たちの髪の毛は、スルトンの御前に出される前は、トルコ人であることがばれないようにと、あるいはいつの日か国の政府で力を得るようにと一時的に伸ばされる。(p. 41 1段落)

付属宮殿の小姓たち

付属宮殿の小姓たちもビュクオダやクチュクオダの小姓たちと同じ生活、衣類、しつけを受けている。唯一の違いはビュクオダやクチュクオダの者たちに対しては付属宮殿の者たちほど厳しく振舞われないこと、付属宮殿のものたちが日給銀貨3枚もらうのに対して彼らは8枚もらえることそしてバシユオダ(室長)へ早く昇進するということである。

(p. 42 1段落)

ドルマンを着た小姓たちの食事

上に述べた3つの宮殿の小姓たちの通常の食事はスープと肉から構成される。肉としていつも同じな *söğüş* と呼ばれる乾燥した羊肉が提供される。スープはというとしばしば変えられる、時には小麦のスープ、時にはお米のスープ、時にはレンズ豆のスープ、時にはズルバつまり小麦、干しブドウとサフランのスープ、時にはゼルデつまりお米、蜂蜜とサフランのスープ、またあるときは *ekşi aş*、つまり米、干しブドウと蜂蜜で作られたスープを与えられた。1日に2回、朝の9時と午後3時に食事をする、そして食事毎に大きな肉と大釜いっぱいのお湯が出される。

(p. 42 2段落)

トルコのパン

パンは我々のガレット(galette)のように平べったく、外皮がある、そしてこのパンの種類はフォドラ(fodla)と呼ばれている。トルコ人がエトメッキ(etmek)という名をつけた通常のパンは、白いものも茶色いものもあり、うまくこねられておらず十分に焼かれていないためあまり美味しくない。各テーブルに12人が座り、“シニ(sini)”と名づけられた青銅製の大きなお盆のまわりに座る。シニジ(Sinici)はお盆を運び、スプーンを磨き、食卓で働き、食卓に関する全てのことに気を配らなくてはならなかった。10人の中の1人が他の仲間のリーダーであり、彼はビョリュクバシュ(bölükbaşı)と呼ばれている。喧嘩をしたものや横暴な態度をとったものを打つために手に長くて大きい柄杓を持っていた。シニジが肉を小さく切り分けた後、ビョリュクバシュがビスミッター(Bismillah)といい最も大きくて良い肉を2つ取り分け、残された全員は〔その後〕肉に群がり見つけた肉を取る。肉の香りのほかに何も残されていない人もしばしば見受けられた。彼らは大きなカップ(kapla)に与えられたスープでお腹を膨らませるほかなかった。スープはお腹を満腹に膨らませられるほどたくさん用意されており、いつも増量されているということもこのことを証明している。(p. 42 終わり)

“48”の数字のところにある宮殿の台所〔matbah-ı amire〕の料理人は、料理を大釜に入れ“13”番の門まで運ぶときに小さなベルを鳴らして食事の時間が来たことを知らせる。シニジは皆両手に2つのシニを持って行き彼らのテーブルへ置く、そして食卓へ運ぶために鍋を満たす。(p. 42 3段落)

スルタンへ捧げられたお祈り

付属宮殿では毎食後にイマームがスルタンへ祈りを捧げ、全ての小姓がアーメン(amin)と返事する。しかしスルタンを騒音で驚かせることがないように、この習慣はトプカプ宮殿では行われなかった。(p. 43 1段落)

ピラフ

週に1回、木曜の夕飯に、ビュユクオダの外で全ての小姓たちにピラフがご馳走される。ピラフはブイオンで全ての水を吸い込ませた米料理である。(p. 43 2段落)

トルコ人の kanaatkarlığı. トルコ人に一番よく食べられている肉。

トルコ人はとても無欲で、また選り好みをしない。もっともよく食べられるのは肉、羊肉や去勢された雄ヤギの肉である。決して牛肉を食べない、もし牝牛であったなら牛乳を、雄牛であったならば肉を失わないために、育てるのに許可が必要だと考えられている子牛も食べたりしない。実際に新鮮な雄牛の肉を好まない。これを塩で味付けしオーブンでススだらけにした料理を好んでいる。この肉は長期間保存ができ、旅や航海のときには彼らのもっとも大事な食料となる。なぜなら肉をこのように乾燥させ、粉(toz)にして、スパイ

ス、玉ねぎ、ニンニクで味付けをして皮袋に入れて持ち運ぶからである。いつ食欲が湧いたときにもこの粉を水で薄め短時間でかなり悪質ではあるがひき肉の状態にすることが出来る。トルコのどこにでも雌鳥はとでも多くとても安く売られている、しかし去勢された雄鶏は少ない、そしてどこを探しても猟鳥は見かけられない、なぜならこれらを抑えようということせず、首を絞めて殺した血を流さなかった動物の肉を食べないという迷信があるからである。猟の獲物の肉はとでも多くハラームであるイノシシ以外のあらゆる種類の野獣を食べる。豚やユダヤ教徒も禁止しているその他の肉も食べられない。ハトはとでも美味しく大きい、あまり見かけられない。(p. 43 3段落)

トルコ人は玉ねぎやニンニクを好む

風味付けに大量の玉ねぎやニンニクを使う、これらは消化を助け、飲料水から起こる下痢から胃を守る。(p. 44 1段落)

ラマザン

朝日の出から夕方の日没まで全く何も口にしないよう義務付けているラマザン月には、付属宮殿の小姓たちは一晩中口にする食べ物を買うために仲間内でお金を集める。一方トプカプ宮殿の小姓たちは5人組のグループを作って宮殿の台所の給仕とともに夕方になると移動し一皿一皿取引をする。(p. 44 2段落)

トルコ人の断食

我々の間でも革新が行われ推し進められた宗教の後ろから来た者たちは〔プロテスタントたち〕は、日が沈むまで一度も食べ物に手を触れず、日が沈んだ後にはありとあらゆる肉や魚を食べるといような断食をする。しかし彼らはトルコ人の様に断食を一ヶ月間続けることは強要されていない。トルコ人がラマザン中にそんなに熱心に断食をするということは、もっとも長い時期や(なぜなら我々のものより 11 日短い太陰暦を使用しているために、ラマザンはあるときは冬に、またあるときはたまたま夏にあたることもある)じりじりするような暑さのもとでさえ、涼しさを提供する水一滴を口にすること、コロンをつけることやあらゆる良い香りのする花を嗅ぐこと、映像によって喜びを与えるあらゆるものを見ること、心地よい声を愛でること、言い換えると五感を楽しませる全てのものを一日中行わないように試みるということである。太陽が我々を照らしている間は全ての世俗的なことや心を乱すようなことから遠ざかり、神聖なことに思いをはせ、アッラーへ祈りを捧げることをより大きな心の清浄さにより行う状態であることが必要なのである。(p. 44 3段落)

小姓たちの飲み物。トルコ人たちの飲み物。シャーベット

一般的に飲み物を入手することは全く困難ではない、なぜなら水は夏も冬も泉から豊富に提供されているからである。さらに凄く暑くなると小姓たちに雪や氷で冷やした水を与え

るといふ気配りを見せている。美食家たちは蜂蜜やペキメズ(pekmez)を購入して甘いシャーベットを作ったりもする。(p. 44 4段落)

夏になると、宮廷の外にいる美食家たちは、雪で涼んだりトルコのいたるところで大量に見かけられるあらゆる種類のフルーツジュースやシャーベットを飲んだりする。誰もが知っているように、ワインは絶対的に禁止されている、そしてこの禁止は絶対的な対策を採ろうという立法者の産物である。なぜならこの酒というものは節度を持って飲まれたならば人間の友となり肉体的にも精神的にも回復の助けとなる。しかし過剰の摂取は大きな混乱へとつながる。このために酒を全く知らないこと、提供の手段を奪うことは一般的に起こりうる混乱を避けるという観点から有効である。この禁止は軍隊の荷物の重要な場所を減らすこと、ワインを荷車へ積んで運ぶために使われる道具一式を節約すること、そして兵士たちがこれを辞めることに慣れるという意味でも有効である。そうでなければ遠征に行つたどこの国でも大量に目にするワインは、当然のように兵士たちに高額で売りつけられるそして彼らの安い給料を短期間で使い尽くしてしまう。このワインの禁止はとても厳しくこれに従わないものは直ちに罰せられる。しかし多くのムスリム、特に他の民族より酔いやすいキリスト教徒だったものたちが(なぜなら本物のムスリムは法により厳しく縛られているので)こっそりとワインを飲むことを防ぐことはできない。(p. 45 1段落)

ドルマンを着た小姓たちの長。小姓の宮殿の長たち

付属宮殿のバシュアース(başağası)は、間違いなくすべてを支配していた宮殿の長である。任命を行う白人宦官長はこの役職をトプカプ宮殿の宦官長の中から望んだものへ与えることができる。第2位には小姓のカフヤーが来る。(p. 45 2段落)

室長の権力

その次の位には室長がくる(室長は部屋の権力者として理解する必要がある。なぜなら付属宮殿の全ての部屋、トプカプ宮殿のビュユクオダやクチュクオダのそれぞれに管理者がいるからだ)。気の向くままに罰する権利と権力を持っている。部屋で彼の次に偉いのは台帳持ちや毎晩夜の礼拝の後に見張りに来る見張り役である。(p. 45 終わり)

礼拝の後小姓は全員自分の場所に立ち、見張り役は全員の名前を何度も何度も呼んで逃げ出したものがないかどうかを点検する。小姓の名前を呼ばれたときには、labbey、つまりここにいますと返事をする必要があった。リストを読み上げた後と、眠る許可を与えられる前に室長は一日のなかでどのようなものであれ失敗を犯したものを鞭で打つ。これが終わった後、室長は杖の先端で床をたたきながら就寝の時間が来たことを知らせる。

(p. 45 3段落)

小姓たちのベッド

そのとき全員小さなベッドの用意を始める。このベッドは敷布団やベッドカバーとして使われるとても分厚いブランケット、寒いときに使われる別の小さいブランケットそして頭の下に置く半 aune [古いフランスの単位：1,188m] の長さの小さな枕から成る。終始無言で寢床を整え眠りにつく。(p. 46 1段落)

小姓の睡眠時間

冬は日の出の1時間前、夏は30分前まで眠ることが許される。しかし日が長く夜が短くなる季節には、トプカブ宮殿では朝食から真昼まで、付属宮殿では真昼から午後3時まで、制服を着た状態ではあるがブランケットを剥ぎ取らせることなく眠ることができる。人を不快にする極度の暑さを鑑みると、この睡眠休憩を取らないことは拷問と似ている。

日中仕事についていない長たちは誰よりも早く起きて、まだ誰も起きないうちに水浴びをする (p. 46 2段落)

小姓の起床

しかし全ての長が持ち場についた後、番人が仕事場をてらすランプを天井へひっぱりあげるとき、よく油の差されていない滑車のきしむ音が皆の起きる合図であり、全員瞬時に着ていたもの、敷布団を信じられない速さで折りたたみ寢床の後ろにある洋服かけに引っかける姿が見られる。皆が机として使っている小さなたんすを持ってきて枕を壁にもたせ掛けた後、その日の掃除や(みんなこの仕事を決まった時間に行わなければならない)全てのたんすの上に2つのランプを点す仕事の当番でない者たちは全員で体を洗いに行く。(p. 46 終わり)

清めを終えた後それぞれの場所に着き、目の前にコーランを開き、ムアッジン(müezzin)のアザーンの声が聞こえてくるまで大きな声で音読する。アザーンの声とともにコーランがあるべき場所におき、謙虚な面持ちで2列になってモスクへと入る。(p. 46 3段落)

上で小姓たちを起こすのに滑車のきしむ音を利用すると述べた。この合図は砂時計のほかに時間を知ることができない付属宮殿にとって効果的である。トプカブ宮殿では騒音で全員を起こし、先に述べた仕事や任務に就くものために目覚まし時計(uyaran çalar saat)を利用した。(注：就寝や起床の合図をするために、鉄製の板の上をハンマーで3回たたく, İ.H.Uzunçarşılı, s.331-ç.n.) (p. 47 1段落)

ハمام長

他の長はというと、ハمامで小姓の背中を洗うテラク(tellak)たちや髪を剃りkazıyıp)あごひげを剃る床屋たちを支配するハمام長である。(p. 47 2段落)

小姓たちはあごひげを伸ばすことを禁止されている

宮殿では誰一人として、たとえいくら高官であろうとも、あごひげを伸ばすことはできない。これは一般的なルールである、そしてトルコ人であごに長い髭を生やすことはその人が自由人で結婚していたり仕事の任務が終わりもはや落ち着いていたり、家を持った人物であることを示す。そうでなければかなりの年齢まで髭を剃り続け、尊敬される年になるまで口ひげ以外の毛を剃っている。(p. 47 3段落)

汚れは厳しく罰せられる

エディルネ宮のハمام長は、小姓が毎週水曜日にハمامに入るときに彼らのドルマン、シャツ、下着を検査する。汚れたものつまり *haşerat* を見つけると、洗濯部屋へ運び持ち主のタッケ(*takke*)を目印として上に置く。点検に引っかかった人物はまだハمامから出る前に前述の宦官に呼び出され、まだ体を暖かく服も着る前に背中を棒で打たれる、その後部屋に戻る。この罰はトプカプ宮殿では全く行われなかった。(p. 47 4段落)

テック、床屋や給料

テックや床屋も小姓のうちの一人である、加えて彼らはプロの専門家であるから髭を剃ったり体を洗ったりした人たちからこの仕事に対する賃金をもらう権利がある。付属宮殿では一人当たりは銀貨 300 枚、トプカプ宮殿では銀貨 1000 枚もらえる。この総額は毎年ラマザン祭りの終わりに与えられる。(p. 48 1段落)

小姓の巻き毛の長さにかんじた規則

ハمام長は月に 1 回小姓たちの伸びすぎた巻き毛を短くする。新人の巻き毛の長さは鼻の先よりも長くてはいけない、一番くらの高いものの長さは顎の下までである。ハمام長は、テックたちがハمامを清潔に整頓されていることや、床屋たちがかみそりをよく整えていることや彼らの間にどのような論争も起こらないように注意している。仕事をちゃんとしていないとみなすと彼らを罰し鞭で打つことができる。(p. 48 2段落)

それぞれの部屋のイマーム

それぞれの部屋のイマームも支配階級にある。しかし授業を受けているものを鞭打つ権利のみを有していた、そしてもし他の不適切な行いが見られたら、彼らを手でのみ打つことができる。(p. 48 3段落)

トゥマルハーネジ(*timarhaneci*)

もうひとつの長は、病気が医者によってちゃんと寝かせるに値するとみなされた小姓たちが友達から隔離して寝かせつけられる病院—トゥマルハーネ(*timarhane*)—の長、つまり病

院長である。この状態の小姓は体調が全快するまでトゥマルハーネに滞在する。

(p. 48 4段落)

患者の治療

患者が完全に比類のない食事治療を施されていることは注目をひく。エディルネ宮では患者にブイヨンの中で調理された小さな団子のようなパスタ、つまりイタリア式のバーミセリからなる断食食を与えられる。このスープの中に入っているものはもっとも屈強で健康なものでさえ病気にするのに十分な味である。トプカプ宮殿では患者にブイヨンといくつかの脂身のない鶏肉が与えられる。

(p. 48 5段落)

幼年小姓は宮殿で頻繁に病気になる

小姓たちがほとんどただ鞭で打たれるだけで教育される付属宮殿では、恐怖や食事や飲み物の粗悪さに起因する瘰癧、結核、慢性的な便秘、su toplama(注：体のあちこち、特にお腹に水がたまること-ç.n.)が蔓延している。伝染病もまた小姓たちが決して安らかになることのできない原因であった。

(p. 49 1段落)

エディルネ宮での伝染病の流行

あなたへ書いている情報の大半を私が直接聞いた人たちは、伝染病の流行がエディルネ宮で猛威を振るっていたことを説明した。この伝染病はクルバン・バイラムのために殺された羊の血や臓物に関係していた。クルバン・バイラムがとても暑い日にあたり太陽のあまりの暑さのために鉛のように溶けたこの生贄の血、皮、臓物が酷いにおいを放った。(信じられているところによると)伝染病がこのにおいに起因しており、12日間で10人が死亡したらしい。なぜかはわからないが死亡率は少し下がり始めた、そしてこの酷い伝染病が多数の死者を出したにもかかわらず小姓たちは宮殿の外に出ることは許されず、お互いの上に積み重なって死んでいくほかなかった。健康なものは病気のものに代わり仕事を強制されたので、病気は彼らにも伝染した。この伝染病によって以前は260人いた宮殿の小姓はわずか150人が生き残るのみとなった。

(p. 49 2段落)

クルバン・バイラム

前述のクルバン・バイラムはラマザン・バイラムの2ヵ月後に行われる。そして主張によると、アッラーの息子の代わりに天国にて40年間放牧をした後、ただこのために地上へと下ろされた雄ヒツジを生贄にしたイブラヒムのこの施しの記憶を行っている。物質的に余裕のある父親や家長は、扉の前で雄ヒツジを殺して肉を貧しい人々に配る。

(p. 49 3段落)

カルファー (kalfa)

カルファーやハリーフエ(halife)たちも上級の地位にある。彼らに与えられた小姓たちへコーランを教え、もし生徒たちの学習態度が怠慢であったならば、彼らを鞭で打って罰することができる。(p. 49 4段落)

チェシメジバシュ (çeşmecibaşı)

トイレや泉に関するチェシメジバシュという名の長がいる。新たに来たもの全員はこの役職を任される。毎日毎食後彼らは前述の場所へ行きそこを掃除したり水で磨いたりする、そしてこの指導を毎食後室長ディヴァーンが集まったときに行う。ディヴァーンは以下のような形で行われる。(p. 50 1段落)

付属宮殿のディヴァーン

食事が終わるとシニジたちはシニやスプーンを冷水で洗うために泉へ行く。室長も手に白い布を持っている。持ってくる全てのシニの上には布のカバーがかけられている、もしシニに汚れがあることを認められれば、シニジは足止めを食らう。スプーンも綺麗かどうか点検される、同じようにスプーンを磨くために使われる布切れやエプロンも検査される。しかし冷水で油を落とすことは難しいので、哀れな小姓はこの汚れを土や砂でこすって落とさなければならなかった。とはいえこの仕事を成功させることができるのは彼らのうちごくわずかであり、このためにほとんどのものが 20 回の鞭打ちの罪から逃れることはできなかった。室長は、シニジが罰を受けているとき、他の小姓たち全員が起立し前述の鉄拳制裁を終えて部屋へひっぱられた後に、室長は教会の聖歌隊のような棍棒で床をたたきながら部屋を歩き回り扉の横へ再びやってきて立ち止まる。そして見張り、つまりその日の部屋の当番である人と呼び寄せて何かばかばかしいことで失敗したものの名前を彼の耳に囁かせる(そのときまで誰も咳をしたいと思っても顔を帽子で隠さずに咳をすることはできない、そうしないとこれは罪とみなされる、なぜならば唾がとんでいかにハンカチに咳をすることが命じられていたからだ)。そのとき小姓たちは震えたり、名指しされる者のなかに自分が入っているかどうかと思いをめぐらせて記憶を探ったりする。見張りは部屋を歩き回り、罪人だと見つかったものたちを指差し始めると恐怖がいよいよ増す。罪が見つかった者たちはすぐに室長の前に並ぶ。室長は、罪がどれほど大きいかをひどく誇張して説明した後、犯した罪の重大性によってあるものへはより小さい、あるものへは大きな儀式でこの国の慣習に従った合奏を行う。つまり音楽の調和を美しくするといって、皮のサンダルを履いた者たちや裸足のかかとを鞭で打つ。(p. 50 終わり)

この楽しみを小さな忠告を告げて終わりにし、楽器を見張りたちに任せた後部屋に行き小姓をひとりひとり自分の場所に呼び、az önce yararlandığı zaman geçici uğraşı hiç düşünmeden 呼んだり書いたりし始める時を知る。(p. 50 2段落)

トプカブ宮殿の罰。スルタンの許し。

トプカブ宮殿では決してこのようなディヴァーンは行われなかった。長の職についている長官たちはどのような種類の審理も行うことなく、毎朝最初の礼拝の前にあらゆる罪を犯した小姓たちを呼び出し適すると思われる形で罰を与える。しかしこの哀れなものたちは鞭打ちが激しすぎたり、たまたま打ち所が悪かった場合に甲高い叫び声をあげると、その声がハスオダへ聞こえる可能性がある。あるときそこから一人のアルズアーが、“お願い”とか“許して”といった叫び声や雷のようなわめき声が起こって、厳しい長官が一瞬にして手足が縛られたために小姓が喜びのあまり3回飛び上がったこともある。付属宮殿でも、食後にデザート代わりに行われる集まりのほか、朝と晩にも罰が行われることに遭遇する、しかしそこではスルタンの耳に入れるためにどれほどうめき声などをあげても無駄であり、地獄にいる者以上に許しや慈悲は望めなかった。

(p. 51 1段落)

モスク官

ディヴァーンについてはこれくらいにしておこう。そしてドルマンを着た小姓のほかの長官の話に移ろう。モスクを清掃し内部の状態を保つモスク官もこれらの長のひとつである。モスクで見かけたものを、笑ったりおしゃべりしていたり、列を崩したりといった小さな無礼を理由として、小姓たちの顔を打つことができる。トルコ人はモスクにおいても、ある部隊を戦場に送り出すときに行われる秩序と座り方が適用される。ランプ番は、モスクや部屋のランプに関すること、ランプに火を灯したりグラスを磨いたり掃除したりすることや芯を用意したりすることの責任を負っている。

(p. 51 2段落)

教師たち

教師担当となっている下男たちは、カルファーたちに授業を行いに宮殿に来た教師たちを出迎え、彼らに歓迎の言葉を述べなかに招きいれて腕を取りながら慎重な態度で部屋へ連れて行く仕事を請け負っている。

(p.51 3段落)

キタプチュ

キタプチュは部屋の全ての本を記録する。

(p. 52 1段落)

小姓たちの道具箱

ラフチュバシュ(Rafçibaşı)は、全ての部屋にある小姓たちの道具箱の置かれている戸棚の世話役である。全ての小姓の衣類、洗濯物、お金そして全ての古い衣類がおいてある1つもしくは2つの道具箱がある。この戸棚の鍵はラフチュバシュが持っている、そして道具箱を開けて必要なものを探すためにそこへ入ろうと思うものは事前に彼から許可をもらわなくてはならない。ラフチュバシュは鍵を開けた後、部屋に入ったものが道具箱を開けて

中にある欲しいものを探すときに友達の引き出しを混ぜないように見張るために彼の横に立つ。全員の引き出しの上に名前を書いているためどの引き出しが誰のものかわかるようになっていてる。

(p. 52 2段落)

コーラン読みまたは死者のための祈祷

最も位の高い小姓にはコーラン読みと名づけられた収入源がある。宮殿で亡くなる何人かの人、魂に平安が訪れるように毎日コーランの一節を読んでもくれる人物に対して遺産から支払いをするためにお金を残す。1 ジュズ当たり銀貨2～3枚であると計算されている。

(p. 52 3段落)

死後に祈りを捧げるといって作られたワクフ

トルコ人やキリスト教徒の間では、死ぬときに少し財産を残した死者の死後に魂のために祈りを捧げてくれるよう遺言を残すことやこのためにワクフを作ること一般的である。スルタンたちのおおよそ全員は、墓の側でときどき祈りを捧げてコーランを読み上げる人物に莫大な収入をばら撒くモスクや病院を建設した。このことはトルコ人が死者の魂へ読み上げられる祈祷の力を信じていること、彼らの後に生き残るものたちの祈りによって魂に平安と安息が訪れることを強く信じているということを示している。

(p. 52 4段落)

魂は審判の日まで死体とともに墓に残る

イエスが生きているものや死者たちに審判を下すためにこの世へ戻ってくるまで、魂は死体とともに、人生を尋問し調べるよい天使や悪い天使の伴奏とともに墓からよみがえると信じられている。

(p. 52 5段落)

拷問

死んだものすごした人生の善し悪しにより、悪い天使によって墓にひどくぶつけられる拷問にかけられたり、よい天使に安息を与えられ死者のために用意された天国や復活した後の幸せを与えられたりする。このため全ての親類や友人たちは死者の魂に祈りを捧げることに気を使う。さらにしばしば墓に行き審判が良い答えを出すように、天使とともによくすごすように、悪い天使が行い非難や脅しの受難に対して当惑することないように忠告する。さらに人生を通して行ったことを知っている者はあれこれの罪の償いをどのように支払う必要があるかを説明した忠告を行う。

(p. 53 1段落)

ムスリムは全員天国へいく

ムスリムたちは審判の日が来ると全員が天国へ行くということ、そして本当のムスリムには地獄の拷問はなくただ墓での拷問が行われるということを知っている。

(p. 53 2段落)

地獄

にもかかわらず、ムハンマドは長い御伽噺のような地獄の描写をしており、地獄を熱い硫黄や沸騰した瀝青物質で覆われているとしている。そこに落ちたものは、炎のほかに吸い込むことができず、酷い顔をした、想像しうるもっとも汚いものよりもなお悪い、嫌なおいにする果物を食べることを強制される。飲み物もだいたい似たようなもので燃える硫黄に似ていると描写している。これに類似するたくさんの種類の拷問を描写して、この地獄が唯一神や彼の預言を信じず創造主を相対化し二人以上の神がいると信じている偶像崇拝者のためにあることを述べている。 (p. 53 3段落)

ムハンマドは、三位一体に対して戦争をしかけた

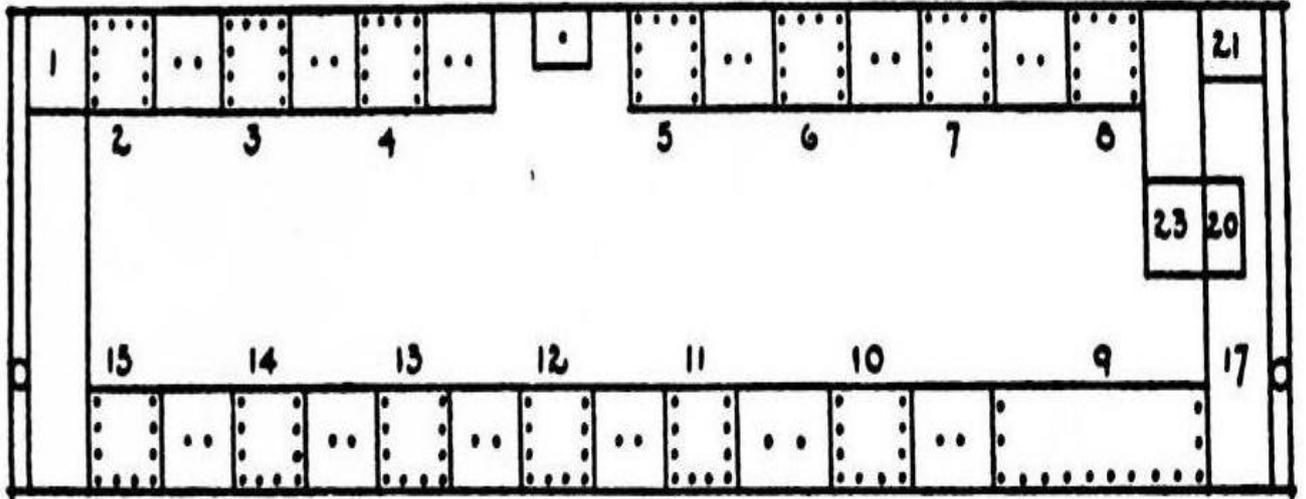
ムハンマドは、キリスト教徒について述べる時三位一体について隠し、これに出くわしたときには抹殺しようとする。ムスリムたちはもし決められた時間に清めを行い礼拝を行わなかったならば、上で述べた地獄へと落とされる。しかしそこに永久にいるわけではなく、熱い石炭の上に一晚中座り鉄の火床の上で忘れた分の礼拝をし、完全にムスリムになる前のものや、無礼に行った礼拝をやり直すと開放金を支払ったとみなされる。(p. 53 終わり)

拷問が永遠のものとは信じられていない。地獄の底のない井戸の中で、真っ赤に燃えた箱の中で腕を縛られ閉じ込められ、そして絶えず情けを求める声をあげる悪い天使の長にとってでさえ罪を許される望みがあった。ムハンマドはこの叫び声は天まで届くとし、千年後にはアッラーは悪い大天使を神の場所に連れて行き願いを尋ねると言った。そのとき彼が罪を後悔することや彼のほかに神を信仰しないことを述べ、明らかな水で身を清めた後は初めの立派な状態に戻される。 (p. 53 4段落)

最年長の小姓は最年少のもの世話役をする、彼らの古い衣類やお金の面倒を見る。同時に無礼な振る舞いや欠点があれば彼らを罰する権利も持っている。しかしトプカブ宮殿ではララ(lala)たちはただ年少者の古着だけをとっておく、お金のほうはというと部屋の金庫へ置いている、そして給料が配られる日に宦官長のところへ行き財物庫へ座り、その上に持ち主の名前のかかれたお金の入った財布を取り出し給料の全てもしくは一部をこの袋に置いた後この口をもう一度縛り封をして再び金庫へと置く。小姓は宮殿から出るまで全てのお金をそこに蓄えておく、なぜならそのときにのみ全ての貯蓄を手渡されるからである。 (p. 54 1段落)

小姓の部屋で何か起こったかをあなたがもっと理解できるように、ここでビュクオダのおおよその形を説明しよう。 (p. 54 2段落)

BÜYÜKODA'NIN PLANI



Bu plan Fransızca yazmada yer almamaktadır; Brenner'in Almanca çevirisinden alınmıştır.

なかに点を打たれた場所は、そこでお互いに寄り添って何人の小姓が生活しているかということ、点が2つだけの場所はというと1つの台座、すなわち一人は位がありもう一人は修行中の2人の宦官が暮らす場所を示している。宦官長たちは、小姓の態度や振る舞いを観察しどのような無礼にも気がつくといふから降りてきて間違いを犯した小姓を部屋の真ん中に連れ出し彼をこの国の決めた方法で罰する。

1の数字は、クム・カプスと名づけられた門を示しこの門の隣にいる宦官長をバシユカプオーラン(başkapı oğlanı)と呼ぶ。

2の数字は、貧乏区(Esfer mahallesi)という名である。

3はアルジェリア区である、なぜなら昔ここへベルベルの海賊がスルタンへ献上した奴隷が住んでいたからである。今日この奴隷たちの隔離された場所はなく他の小姓たちと混ざって生活している。(p. 54 終わり)

4は扉区である。

5

6はノミの区である。

7はシラミの区である。

8は室長区である。

9はかまど区、つまりハمامのかまどや17の番号の部屋の暖炉を燃やす人の場所である。

17の部屋の隣には暖かいトイレに通じる暖炉がある。

18の番号は義務や前に述べた状況において全身の清めを行う場所である。

10は知の区である。

11はタフトビット(Tahtabiti)区である。 (p. 54 3段落)

スルタンの子供たち。王子たちの教育。

12のシルヴァーン(Şirvan)は統治に加わることが認められ、自分に知事職や封土を与えられた時代に王子たちが住まわされていた高い場所である。教育のためや、宮殿で先に大きくなったものが就いていた位に就くためにそこへ住まわされる。しかしその後この王子たちのいくらかは帝国の中に騒動を巻き起こしたり、父やあるいは王座にいる親戚に対して反乱を引き起こしたために、彼らを国家の統治から遠ざけたり国政から締め出すことが適切と考えられ、さらにこの問題において勅令が出された。加えてこれからこのように王座に就いた新しいスルタンは、即位するや否や亡くなったスルタンの息子たちを殺すように決められていた。なぜなら同じ王家の王子たちの間でしばしば発生し、時には自分の家族も国も完全に破壊する争いを防ぐためには、この非常に残酷かつトルコ人の暴虐さに適した方法よりもなおふさわしく確実な方法は見つけれないからだ。 (p. 56 1段落)

人は大帝国の息子として生まれたからといって、生まれてすぐ殺されることは正当だろうか。王家を存続させることへの熱望が兄弟への自然な感情を忘れさせ、己の手を彼の血で汚さざるを得なくなるのか。 (p. 56 終わり)

そして王家の中で兄弟殺しをこのように容認するよりも、内戦で困窮する危険を犯すほうがよりいいのではないだろうか。今ではこの区長たちのターバンを巻く者たちや壁掛け時計の世話をするものが生活している。

前者をターバン係り、後者を時計係りと呼ぶ。唾者や小人はこの高い場所の下で生活している。

13はイマーム区である。なぜならそこでイマームが生活しているからだ。

14はサゼンデ区である。

15は長官区(Baş mahallsi)である。バシュカルファはここにいる。どの区にもこのカルファの1人が住んでいる。

16の数字は泉への間である。

17の数字は清めのかまどである。

18の数字は清めの場所である。

19の数字はトイレである。

20の数字は泉である。 (p. 56 1段落)

このビュクオダの描写は他の部屋を説明するという意味でも有意義である、なぜなら他の部屋でも小姓たちは同じように整えられ住まわされているからである。唯一の違いはビ

ユクオダがより高い地位の部屋のため入ったり通り過ぎる場所としての機能を持っていること、他の部屋では宦官長が小姓たちをビュクオダやクチュクオダにいるほどには厳しく管理して頭を悩ませることはないということである。(p. 57 1段落)

さあ前に始めた説明に戻ろう、そして宮殿の見取り図に書き記したほかの数字の説明を続けよう。

15 の数字はシニジが汚れ物やスプーンを洗いに行く場所である。もっとも屈強な小姓たちの中から選ばれた風呂番たちもここで軍事訓練を行っている。(p. 57 2段落)

弓術家たち

この力があり強い小姓たちの大半は弓を射ることで戦い、この技術において必要な全ての教育を受け熟練されている。これに到達するために行われる最初の訓練は壁にくぐられた滑車を用いたものである。中に 10 オッカ(okka)(1 オッカは 42 オンスに相当する重さの単位である)の石を入れた袋がぶら下がっており、滑車から垂れた紐を力を加えて後ろへひっぱり、左手は壁につく。(p. 57 終わり)

この訓練によって筋を伸ばす、力がつくとき毎日袋に新たに石を追加する、最後には袋の重さは 40 オッカにもなる。このようにして十分に訓練して少し腕を広げたのち、やわらかく曲げやすいが、弦の箇所には鎖をつけた弓を与えられる。この弓は矢を射るためではなく、毎回の訓練で疲れるまであるときは右手で、あるときは左手で伸ばすというように、腕を鍛えるために使われる。その後それぞれの距離に応じてやわらかい弓や硬い弓を与えられる。これは矢を射る前、矢じりを弓の柄に触れるところまで伸ばす。誰が弓をたくさん続けて伸ばすことができるかといって賭けをする。多くのものはこの作業を 200 回もできるほど力がある。この訓練でこのように腕を鍛えたものたちのうち何人かは鉄の弓を扱える者のみに与えられる称号である‘ケマンケシュ’を得る。実際はこの弓は鉄製ではなく、非常に硬い動物の角でできている。この弓は、訓練をしていないものが全力でひっぱったとしても弦は彼らの耳の下に置かれた 1 銀貨コインを落とせるほどもびくともしない。彼らはこの弓で力や技術を示しながら完璧に射る、蹄鉄に矢で穴を開けたり、弓をガラスの中を全く左右にひびを入れることなくただ弓の直径ほどの穴だけを開けて通過させたりする。ガラスを矢じりのない、藁より細い矢で射る。射撃の技術の話題はというと友人の 1 人の 2 本の指の間に挟まれた一種の銀貨を射抜けるほど熟練されている。この若い弓術家たちについて、私には全く信じることのできない作り話のようことを聞いた。私に指 3 本分の厚さのある銅版に穴を開けることのできる弓術家がいると語ったのである。

(p. 57 3段落)

第 2 の訓練はとても重たい幹や断片を運ぶことである。一番軽いものから始め、徐々に最も重い欠片を持ち上げることにとても慣れることができたものは、最も重い幹をまるで手

で棍棒でも運んでいるかのように楽に運ぶ。これらは技術が生まれ持った力を簡単に変えられるということや、生まれ持った力に新しい力を与えうることを示している。また、彼らは子牛を運び始めた者が動物が成長し終わるまで毎日運び続けて、最後には雄牛を苦勞せずにとれだけ肩に担いで耐えられるかということに挑戦し始めた。(p. 58 1段落)

第3の訓練は、右手の上に40,50,60あるいは100リブレ(libre)(1リブレ=500グラム)の鉄の重りを持ち上げることである。手首をこれほどの大きな負荷を引くことに慣れさせたものの力や技術によってこの重さを変える。中には120リブレやもっと重いものを片手で頭の高さにまで上げられるものも現れる。訓練や慣れが人間の力をどのように増強されるのかということを知らされたとしても、この偉業は信じられないように思える。

(p. 59 1段落)

刀の訓練

第4の訓練は、棍棒や刀の訓練である。左手に盾の代わりにクッションを、右手には刀の代わりに棍棒を持ってこの訓練を行う。大変に熟練した動きで用心深く前に行ったり後ろに行ったりする様子や戦うこと、お互いに様々な打撃を振り下ろす様子を見ることはとても楽しいものである。この種の楽しみはポーランドに広く広まっている。そこには一種の民衆剣士がいた、そして獰猛な動物と戦った後、彼らはあたかもコメディアンのようにお金を代償に人々の前に現れて殴りあう。宮殿の剣士の小姓たちも並外れた刀の一撃を振り下ろす訓練をしている。たとえば皮膚がとても硬い死んだラクダの足を切ったり、ヒツジの頭を一撃で切り落としたりする。スルタン・ムラドは、動物を使って訓練する代わりに罪人、特に脂ぎった太い首をした罪人の頭を切り落とすことを楽しんだ。このような訓練は彼のような王には全くふさわしくないことであつたために、彼はこの楽しみのために変装をしていた。さらには、町を変装したまま歩いているとき太って脂ぎった男と出会ったときは、無罪であろうものたちの喉をかき切ることをとめられなかった。何度も通りの真ん中でこの種の男たちを背後から捕まえて、これといった目的もなく頭を跳ね飛ばした。

(p. 59 2段落)

レスラー

第5の訓練はレスリングである。これの仕事に専門にしているものはレスラーといわれる。レスリングを行おうと思うものたちは、服を脱ぎオリーブオイルに浸された雄ヤギの皮で作られたパンツをはき‘掴まれる場所を残さないように’とか‘お互いの手をつかむことができるように’といって全身、さらには頭まで油を塗りたくる。完勝するためには敵を背中やへそを空に向ける形で引き倒し上に乗らなくてはならないスルタンの御前でレスリングをするときはその他の崩し方はそれほど好まれない。なんとか勝利しようと熱情とやっかみの中で互いに鎖から放たれたように襲いあう。自然が彼らに自分を守るようにと言

ってくださったものを最後の一滴まで使い果たし、なにも考えることなくお互いに噛み付き、引き離し、引っかきあう。(p. 59 3段落)

槍の訓練

第6の訓練は槍の訓練である。槍で目標を射ることに慣れるように、始めに非常に重い鉄製のくいを使ってそれを可能な限り遠くへ投げる。力がつくと命中させなければならないから毎回もう少し遠ざけられる。この訓練にかなり慣れ、とても熟達し技術が身について槍をとて正確に投げることができるようになると、的から50歩離れた場所から我々の火薬を用いた武器で得た的を全く比較できないようなやり方でいとも簡単に射止めることができる。(p. 60 1段落)

ジュンディ。青年騎士の馬術の才能

7つ目の戦いは馬術である。この素晴らしい訓練を好きなものはジュンディ(cündi)と呼ばれる。スルタンの厩舎にいる馬に乗って彼らを教育する。彼らへこの技術を長年訓練してきた大カイロパシャはジュンディたちを宮殿に紹介した。武器や戦争にとて興味を持っていたスルタン・ムラド4世は同じように馬にもとて通じており、カイロから彼の時代にもとて熟達した40人のジュンディを呼び寄せた。これらへもたらされた技術はほとんど信じられない次元のもので人々に幻の産物のように思わせた。起こった事を何度も自分の目で見た人を信用する多くの人が、私へこれらを事実であると言わなかったならば、信じてください、この詳細をあなたへ伝える自由を私自身に決して感じることはできなかったでしょう。はじめに、このジュンディたち全員が投げられた槍を馬上でさっと受け取るという技術を持っていることをお知らせしよう。幾人かはギャロップに入ったときに馬の鞍をはずして、一時手で掴んだ後、全くとまることなく再び馬に鞍をつけることができる。(p. 60 終わり)

他のものは鞍の上に立ち馬に乗ることができ、何人かは片方の足をひとつの馬に、もう片方を他の馬の上に置いてギャロップで駆けることができる、そしてこのような困難な状態で馬の蹄鉄に矢を射たり、とても高い木に止まっている鳥を射殺したりすることができる。何人かはというと落馬するかのように馬の腹部にすべりその後再び鞍の上に現れる。しかし私への説明の中で最も信じられない光景は以下のものである。ある日このジュンディが馬に乗るのを見て楽しもうと思ったスルタン・ムラド4世が、それぞれにたいして鞍の上に立って馬を操っているときに、全くスピードを落とすことなく馬を交換するよう命令した。スルタンを喜ばせるために、何度も落馬し、大半が鼻を折った後に、ついにこの技を成功させた。その後子作りに励んだスルタン・イブラヒムも、あるいは現在王座にあり狩りを最大の楽しみ、ほとんど唯一の仕事としている息子のスルタン・メフメドは(この状況は人々の間で言葉遊びのひとつとなっている：父は女狂い、息子は狩り狂い)この類まれな演技を気に入った。しかしそれにもかかわらずこの青年騎士を立派な位に昇進させて彼らに気前

よく褒美を与えた。イスタンブルではもはやこの驚くべき技を成し遂げられるものは残っていなかった。大カイロにこの種の男がまだ出ているのかはわからない。トルコ人たちは乗馬がいかにかまとも、我々フランスやイタリアの騎士たちの様な馬の調教については知らない。(p. 60 2段落)

トルコ人の馬の調教方法

馬はギャロップを行うのをよく知っており、大きな疲労を知らないで走れるようにしつづけるので十分だとしている。車輪(çark)、後ろ足での起立、半車輪(yarım çark)や他の調馬術の数々のひとつにも当てはまらない、さらには馬を手綱なしで、手で歩かせることができるものの数もとても少ない。彼らの馬は我々スペインやナポリで育てたものほど美食であったり丈夫な歯を持ったりはしていなかった、しかしあごは丈夫で、首は短く頭はまっすぐに伸びている。このほかにもとても素早く、臀部の繊細さや筋肉のみがついた脚の細さにもかかわらず素晴らしく力がある。(p. 61 1段落)

トルコでのよい馬屋番

トルコの馬屋番は感嘆の念を引き起こすような驚くべき方法で馬の世話している。干し草を少しずつ与え、馬の正面にカラスムギの代わりに 1 日に 2 回大麦、時には細かく刻んだワラを置くのである。(p. 61 終わり)

決して床にワラをばら撒かない、そのかわりに排泄物を全く何も混ざっていないよく乾燥した砂のような状態にする、馬小屋の床を十分にたたいて固める。遠征のときには馬を地べたに、あるいはこのために持ち運ばれていた分厚いフェルトの敷物の上に寝かせる、汚れを綺麗にするためにたびたび労力を使う。(p. 61 2段落)

馬を歩かせる一日の平均距離

このほかにも旅に出ているとき、とても急いでもいけない限り、決して馬を 1 日に 10 や 12 フェルサフ(fersah)以上歩かせない。しかし急がなくてはならないときは、これほど疲れを知らない馬はいない。蹄鉄は我々のものの様に釘を打ちつけていなかった。石により耐えるために寒いときに叩かれた細くて繊細な蹄鉄があるのみである。(p. 62 1段落)

馬の馬具一式。スルタンの馬と飼育場。

馬具一式は常に非常に華美なものである、そしてトルコ人たちの鞍は特に壮麗であり、これらは一般的に銀や宝石で飾り立てられている。スルタンの宮殿の馬小屋には自分の乗用馬としてのものや、遠征の時に連れて行くために飼ってあるたくさんの馬のほかにも宮殿から出廷する、そしてある仕事に就いた小姓たちを短期間で準備を整えさせるための馬など、様々な場所で大きな馬小屋がある。ひとりの馬丁がたった 2 頭の馬の面倒を見ていることを考えると、この仕事にどれほどの人が従事しているかを理解できる。スルタンの側

には多数の馬丁、それと同数の馬具屋や蹄鉄工がいる。

(p. 62 2段落)

大厩舎番

大厩舎番は馬に関する仕事に従事するものたち全員を管理している、そしてそれに次ぐものは小厩舎番である。その下にはここでは数え切れないほどの、容易に想像できるより下級の多くの職種がくる。馬丁へ、スルタンが遠征へ行くときには彼と彼の側近全員の荷物やテント、宝物や衣類を運ぶラクダ番職にあるものもいた。

(p. 62 3段落)

第8の訓練は、300～400 オッカもある非常に重い木の棒のような大荷物を肩に担いで運ぶことである。小姓たちは、ラマザン・バイラムの前夜にこのような青年ポーターがあるものは370 オッカ、また他のものは380 オッカもある大きな2つの絹のペルシャじゅうたんを運ぶ様子を見慣れているスルタンへ力を示すためにこの訓練を行う。彼らの中で最も力があり、重いものを持ち上げる訓練をつんでいるものは、この絨毯を160歩間肩に担いで運ぼうと試みる。もしこの試みを成功させたり絨毯という荷物の下でよるめくことなく運ぶことができたなら、銀貨500枚の入った袋で褒賞を与えられ、宝物庫へと昇進させられる。その後この部屋で宝物棚や高価な家具を移動させたり、運ぶときに使われた。この小姓が前述の絨毯を運ぶとき、他のものは彼らを見るために部屋から出てきたり、軍楽隊がダヴル(davul)やズルナ(zurna)、ネフィル(nefir)で運んでいるものを励ますために演奏をしているとき“アッラー、アッラー力を与えたまえ”と叫びながら彼らを拍手喝采したりする。私がこの調査の聞き取りを行っている人たちのひとりには私に自分の目で見たことを付け加えてこう説明した、ある青年ポーターはこの絨毯の重さに満足せずそのうえに宮殿の小人の一人を座らせ、道の小石が雨で滑りやすくなっているにもかかわらず(必要なときに手を貸すために)隣で歩いている宝物庫の小姓の手を全く借りることなくゴールにたどり着くことに成功した。この絨毯を運ぶ者たちは門(パービュッサーデ)に着くと、巻き毛のバルタジュが荷物を降ろすのを手伝い絨毯を門の正面のポーチの下に広げる、そして王座を準備する。スルタンはバイラムの朝、自分によいバイラムをと願いに来た国の高官たちの祝いの言葉をそこに座ったまま受ける。

(p. 63 1段落)

スルタンとバイラムの挨拶を交わしに来た高官たちの慶賀の挨拶の儀式

バイラム月の第1日目、つまり新月が人々の側からはっきりと見える後光が来る晩に、宮殿の護衛兵が一方は海峡へ面しており別の面はイスタンブール橋に面した海岸のサライブルヌから行う3つの大砲の砲撃とともに新月を祝う。この合図が行われるや否や、すぐにバイラムの準備に取り掛かる。(p. 63 終わり)

上で説明した絨毯や王座を準備し、白人宦官長が夜中番をしていたアルズ・オダの扉を飾る。次の日、側近となっている帝国の高官たちは日の昇る2、3時間前に宮殿にやってくる。そして日が昇ってすぐにスルタンがハスオダから出てきて祝いの言葉を受け取るため

に自分用に用意された場所に座る。

(p. 63 2段落)

タタールハンすなわちタタール帝国

左側には、起立している白人宦官長の前にタタールハンすなわちタタール帝国のトプカプ宮殿で人質となっている息子たちを王座に近づけさせる。父の行動に責任をとらせるために人質としてとったこと理由は、タタールハンを常にスルタンの側にいることや彼の利益を守ることを強制するためである。スルタンはこの方法によってタタールの地の王冠を、王家のうちのひとりであるという条件で、望むものへ与えることができたり王座に別の人物をつかせたいときには、ハンあるいは王を王座からおろしたりすることができる。このタタールハンの王家はオスマン王家の後継者であり、もしオスマン家が衰退したらトルコ人の帝国は彼らが継ぐことになっている。地面に額がつくほど跪き聖なる日があなたに幸せをもたらしますようにと一語にスルタンに祝いの言葉を述べるのはこの人質たちである(私に話してくれたことによると、スルタンは立ち上がり彼らを迎えるために3歩進む)。その後スルタンの手に口づけをし、スルタンも指の先で彼らの手に触れる。タタール人たちが下がると、スルタンは王座に座り白人宦官長が今回は大宰相を指名する。大宰相(が挨拶している)間にはパシヤやベイレルベイ、宰相、そして最後にイエニチェリ隊長である選抜された軍の司令官とともにスルタンの右側に立って待っている。(p. 64 1段落)

大宰相

ディワーンの議長をしていたために帝国の最高顧問である。財政と外務を管理していたために宰相長でもある。時には自ら間接的にあらゆる種類の命令を送り全ての軍を指揮していたために最高司令官であり、そしてスルタンの印章を彼が持っていてあらゆる問題に適していると思われる勅令を誰かに確認させるように求められることなく発行し印を押すことができる大宰相は、彼が気に入っているものたちの見解を採用し全てのディワーンを他の宰相たちの意見を聞くことなく自分の考えで解決する。(p. 64 終わり)

このような深く限らない権力で彩られたこの仕事はスルタンの一番のお気に入りの人物に与えられる。そしてスルタンはしばしばこの仕事に任命する人物の才能を確かめることができなかつたために、宰相職はしばしば経験が浅く、この仕事の必要とする力を持たない人物の手に渡ってしまう。王座に近づいた宰相は地面に跪きスルタンに祝福をする、片手で膝を地面につき、スルタンが前にまっすぐ伸ばした手に口づけをしたとき白人宦官長が彼を後ろにひっぱる。宰相は彼の場所に立ちスルタンの左側にはカザスケル(kazasker)、nakibü'l-eşraf すなわちムハンマドの血筋を引くものの長、ムッラーやシェリフ(şerif)、つまり大都市のカディ(kadi)や宗教界の指導者とともに職にあるムフティーと呼ばれる。

(p. 64 2段落)

ムフティー

自分を迎えるために1歩踏み出したスルタンへ近づいたムフティーは、手をへその前で組み上半身を地面にまっすぐに屈めてスルタンの耳へ何言か囁きスルタンの肩にキスをする、時々には思いついたほかの会話を少しする、その後後退して元の場所へ戻る。宰相はスルタンの隣に立ち全員をそのときが来たら名を呼び、陛下の御前に来る必要があるものを指名する。このようにしてスルタンも働いているものひとりひとりの権力や特質についてある意味で情報を与える、彼らに対してどう振舞うのが習慣なのかを忠告する。なぜならスルタンは口づけをするものたちのためにあるものには手を、またあるものには上着の裾を、あるものには袖口を差し出さなくてはならないからである。儀式の全てを取り扱った本ではこれらの全てを詳細にかつ広範なかたちで説明している。スルタンの御前に最後にイエニチェリ隊長が来る。一団が少し下がり、スルタンの馬が連れてこられる、スルタンが馬に乗り側近を従えアヤソフィアジャミィへ行く。バイラムの礼拝を終えると、再び全ての側近とともに上で述べた場所〔バービュッサーデの前に設えられた王座〕に戻る。高官はここでスルタンから許可をもらいディヴァンハーネへ連れて行く。スルタンもハスオダへと行き、そこにずっと置かれている王座に座りアルズアーや太刀持ち、ハスオダのもの、カフタンを着た宦官長や小姓たちもスルタンの前に来て跪いて特権階級の者たちと同じようにあるものは手に、あるものは上着の裾に口づけをする。スルタンがハスオダのものたちの祝いの言葉を受けているとき、他の部屋の小姓たちはかなり離れた場所で引きずっている袖口に口づけをするのみである。ディヴァンハーネで帝国の高官たちへ食事が振舞われ、スルタンは職階級の上から16番目までのものに中がマツテンやクロテンの毛で覆われたカフタンを与える。(p. 65 終わり)

食事が終わると男たちは退場し、スルタンと母后へお祝いを述べに来た王女たちの馬車が中に入る。王女たちは宮殿で3日間飲んだり食べたりして宮廷を去る前には必ずプレゼントや褒美を奪い取る。帝国の一番の大金持ちの男と結婚させられた、あるいはその中からバイラムの日だけにだけ外に出ることが許される旧宮殿送り込ませたこの王女たちについては後で語ることにする。(p. 65 1段落)

王女たちの馬車

馬車に関しては以下のことのみを説明する。我々のものの様にばねが付いていないために、これらはせいぜい *brouette* や *coche* とよばれる。実際内装はとても豪華に飾られているが外は派手に塗られたベネチアン・ブラインドや格子から見るができるのみである。2頭の馬に引かれ、御者も馬の1頭に乗っているこの馬車は、ポーランドやハンガリーの屋根つきの馬車にとっても似ている。(p. 66 1段落)

アルズアーたち(arzağaları)

18番は宦官長が内廷区画の長であるアルズアーとともに娯楽に行く部屋である。アルズア

一の総数は9人である。ハスオダの4人の長は、スィラフダルアー(silahdarağa)、チュハダルアー(çuhadarağa)、リカブダー(rikabdağa)、トゥルベンドオーラン(tülbendoğlanı)である。他の5人はそれぞれの部屋の長である。金庫のカフヤー、鷹匠長、ハスオダ長、門番長などである。これらをアルズアーと呼ぶ、なぜなら嘆願をスルタンに届けることができるからである。毎週水曜日の夜には各人がそれぞれにご馳走を振舞い朝まで音楽や香、踊りとともに珈琲を飲みながら楽しむ集まりがある。木曜の朝にはそれぞれいつもの自分の業務に戻る。

19番はハمامのかまどのある場所である風呂番たちの部屋である。火を燃え続けさせるためや火事の危険を防ぐために4人の風呂番が常勤している。(p. 66 2段落)

セフェルリたち。スルタンの洗濯係

20番は、セフェルリと名づけられた、70、80人くらいの小姓たちの部屋である。(p. 66 終わり)

スルタンが遠征や旅に出るときには彼の洗濯物を洗う仕事にこの小姓たちが従事していたためにその長であるものたちに対して、この仕事を表すものとして洗濯係長と呼ぶ。宮殿にいるときはスルタンの洗濯物は女性たちが洗うが、前述の長は毎週木曜日には他のすべての小姓たちの前でスルタンのターバンを石けんをつけて洗い続ける。小姓たちは彼の周りで、尊敬の念を示すために腕を組んで頭を地面につけたままでいたり、あるものは冷たい水や湯を運び、またあるものは石けんを与えたりする。その後このターバンを乾かすために部屋の前に広げる。たたんでにおいを振り払った後ハスオダへ運ぶ。(p. 66 3段落)

小姓たちの洗濯物はどのように洗われるのか

新人小姓たちが住んでいる付属宮殿では火曜日を洗濯の日とされている。そしてその日に小姓たちは共有の銅の洗濯たらいで自分たちのものや、長やカルファーたちの洗濯物を手で洗う。みんな自分の石けんを使う。仕事を昼頃に終わらせ、洗濯物を乾かすために庭に広げる。(p. 67 1段落)

汚れはとて厳しく罰せられる

洗濯の仕事が終わると室長が検査をするためにやってくる。綺麗でないもの、つまり運悪く上にシラミやノミが残っている洗濯物を集める。あらゆる種類の汚れや穢れを除くためには清潔でないものを罰することが一番であると信じている室長は、審査を通過し遊ぶ許可をもらったものたちが庭で走って遊んでいるときに洗濯物をちゃんと洗えていなかったものたちを15~20回鞭打つ。洗濯物はもう一度洗いなおされることとなる。

(p. 67 2段落)

小姓たちの遊びや娯楽

このファラカ(falaka)の子供たちが休憩時間に行うもっとも一般的な遊びや娯楽は、素足や下着一枚で走り回ることや、レスリング、馬とび、石を片手で一番遠くへ投げる競争をすることなどである。このベイたちが遊んでいるときには、パリの全ての下男が出すものよりも大きな騒音が発される。私はこのように言うことができる資格がある、なぜならペラでガラタサライとして知られている宮にかなり近い場所で住んでいたからである。正直に打ち明けるとその時には全ての悪魔がこの学校に閉じ込められそこで公開の会合を行っているかと思われたものである。

(p. 67 3段落)

宮殿の女性労働者

トプカブ宮殿では白人宦官長や小姓たちの洗濯物を洗うために選ばれた何人かの女奴隷がいる。どの小姓も自分の洗濯物を束にして名前や洗濯物の量と素材が書かれたメモを束の中に置く。大きな枝編み細工のバスケットに集められたこの束は病院の部屋に運ばれる。新人宦官長は週末に新人小姓が1の番号の門に持って来る洗濯された洗濯物を受け取って部屋の門へ運ぶ。小姓たちは洗濯物を受け取って部屋の前に置く。その後皆やってきて自分の束をとる。洗濯をするこの女奴隷たちは何一つとして無くさないように、変えないようにと注意する。なぜなら彼女らに対して文句を言われたり何個か無くしたりすれば、間違いなくとても酷く打たれるからである。イスタンブルに親戚や兄弟、友人がいる幾人かの小姓は洗濯物を洗ってもらうために彼らに送ったりする。

(p. 68 1段落)

小姓たちの衣類の清潔さ。トルコ人たちの休日の金曜日。

新人小姓が住んでいる宮殿では金曜日を衣類の修理にあてている。トルコ人の習慣を知っていて金曜日が彼らの休日であることを知っている者は、このような日にもこのような仕事をするに驚くかもしれない。しかし、預言者が一週間のうち毎日働くことに許可を与えていること、さらにこの命令を出していること、年にたった2回のバイラム〔ラマザン・バイラムとクルバン・バイラム〕では手工業者の仕事台が空っぽになることや商人も取引や買い物をしないことを知っておく必要がある。それでも金曜日には他の日よりより儀式的なかたちでアッラーを崇拝することや説教が読まれているときにモスクへ行くことが義務付けられている。金曜日は礼拝の後に希望するものは仕事に就くことが許されている。この立法者は人民が全ての罪の母であり全ての悪事の源である怠惰へと向かうよりもパンを得るために働くことはずっと良いと考えていた。そもそも休日を働いて過ごすことは神が見ているのに酒場へ行くことや我々のところの手工業者が行っているようにこの日をギャンブルや娯楽のために使うことよりも大きな罪になると考えることができるだろうか。この神聖な日の名前に適した形で過ごすことのできるものは少なく、人々は一日中礼拝や本来なさなければならぬ慈善活動を行って過ごすことはできないのである。

(p. 68 2段落)

このために小姓たちは金曜日の午後3時までに衣類を繕って直した後服を着て室長の点検を受ける準備をする。室長は下手に縫われてないかどうか見るためにあらゆる方向から点検する。清潔さという点で責めるべき過ちがあると彼らをその場で罰する。ハスオダの小姓たちは一日中脱いだり着たりする苦勞をせずすむように、衣類を同僚の仕立屋たちに縫わせている。

(p. 69 1段落)

靴の清潔さ

宮殿で毎日真昼の礼拝に上履きを履いて行く小姓たちは靴を定められた場所に残す。そして彼らがモスクにいるときに礼拝に参加しない室長は、部屋の中を歩き回って靴を点検し汚いものや穴が開いたもの、状態の悪いものを部屋の真ん中に出す。その後正午と日の入りの間に行われる(このため一年の最も短い日には2時に、もっとも長い日には4時に行われる)真昼の礼拝から戻ってきた小姓たちは、靴を分けるために費やした努力の代償を何回かの棒うちのお仕置きで持って補う。

(p. 69 2段落)

室長は同時に、開けておくことや錠をつけないように強制されていた引き出しも点検する。そして中に珈琲や砂糖、煙草のような嗜好品がないように気をつける。同時におかしなメモ書きや恋文がないのかも見る。実際にはこのベイたちが宮殿の女性たちから手紙をもらう可能性はない、しかし室長はあきもせずいろんなことをしでかす小姓たちが仲間からたくさんもらう手紙を探し出す。なぜなら全く女性の顔を見られないために、小姓同士で恋に落ちると信じているからである。特に近い場所で寝ているものがお互いにひどく優しい愛情を育んでいることや必要以上に争っていること確信すると、場所を変えて引き出しも運ぶ。トプカブ宮殿では席替えの習慣は頻繁にあるけれども。上記のような靴の清潔さに関する習慣はそこでは全く見られない。

(p. 69 3段落)

小姓たちが互いに感じる常でない愛情

護衛兵や新人小姓、イエニチェリ、マドラサの学生の部屋のものだけに広まるだけにとどまらず他の集団の男子の間にも普及し、東方世界では何千もの種類の色狂いにつながるこのおかしな情熱や粗野な愛情について私が述べてみますと、世界のどこよりもスルタンの宮殿においてこの汚れたものももっと輝かしく力強い形で息づいているということを付け加えなくてはならない。この宮殿では時に若くて美しい彫刻のような部屋の友人に対して投げかけられるもの言いたげな視線が会話や彼らの心の上で常に影響力を持っているので、その人がいかに賢く良い人間であろうとも自分にとっても友好的な人物へ好意を寄せるのを防ぐことは難しい。はじめは全く罪の要素を含んでいないこの好意は時間とともに墮落して愛へと変わる。小姓は自分たち以外に親しいものを作れず、女性たちと会話をしたり顔を見たりすることが全く出来ないためにこの変換がとても早く行われる。この不道徳はあ

るときはどうしようもなく激しくなり何もかも彼らを止めることはできない。小姓たちの眉の動きや言葉、振る舞い、動作を見逃すまいと四方から絶え間なく観察する長や宦官長たちのしばしばの点検にもかかわらず、何もかも彼らを感じた愛情を互いに伝え合ったり希望を示しあったりすることを妨げることはできない。この罪を犯していると疑われたものは背中に雨のような鞭打ちを受ける。罰を受けた傷でさえも、彼らをこの罪深い友情から遠ざけたり肉体的欲求を満足させたりすることを防ぎきれない。さらにこの種の友情に興味を持っている人たちは、愛情の誠実さや永続性を友人である小姓たちや宦官たちへ示すために、死さえも喜んで受け入れる。激情を一度手に入れると何事にも挫けることはない。ライバルを消すために頼みとするものがない人物には他に方法がなく、ときどき嫉妬が先立って世界一嫉妬深い夫でさえも試さないほど大きく目立つ報復の方法を見つける。部屋でおまじないをしてそれぞれ自分の友人の側に立った小姓を互いに争わせる。幾人かの人には私に自分がいた時にこの種の謀反が起こったことや長い間何百万回も鞭を浴びせられうることを説明した。もっとも反抗的なものの巻き毛を切り落とし、スルタンのカプクルであるものを示す全ての象徴的なものを取り除いてその後宮殿から追い出され遠くの要塞や島へ追放される。(p. 70 終わり)

一番鞭うちの刑にされるのは新しい小姓であったり、位の低い小姓であったりする。長に出世したものや就いている仕事のために他の小姓たちの間で目立ってしまうものの恋愛はというと隠されている。彼らはほとんど完全に自由に恋をしている。しばしば部屋の窓から最も美しい小姓たちを盗み見に行ったり彼らに贈り物を送ったりして、モスクに行ったりする。あるいは部屋の外のほかの場所で彼らと出くわす可能性を見つけると、助けを申し出たりする。恋愛をより順調に行うために彼らを昇進させて短期間で自分の財産や不動産、仕事のパートナーにし、宮殿から自分とともに出ることができる立場を与え、スルタンが彼らに与えた支配地へ赴くときにはともに連れて行くということを約束する。

(p. 70 1段落)

イスラムへの改宗

信仰を捨てキリスト教徒であることを辞めるよう強制されたものが終生故郷を恋焦がれることなくトルコ人の間で生活することを選択する主な理由は、宮殿で始まりありふれた部屋で死ぬまで続くこのありふれた友情である。天国の父(Ahret babası)(友人やパトロンにこの名を与える)は、彼らに対して家にいる実の父と同じようによく振舞う。少なくともキリスト教に改宗し、罪を犯さないことが必要だと私が語りかけ、トルコの地から安全に逃れられるよう手助けすることを約束した知性のある幾人かの改宗者たちが私に述べた一番の有効な理由がこれであった。彼らは私に父の宗教にいつも好意を抱いていたことを打ち明け、頭にターバンを巻いていたとしても心ではキリスト教徒でいられうるということを信じていた。実際にはカトリックへ簡単に改宗することができるが、大半はこの無宗教の者たちとの間に、私たちのものよりも強力な本当の友情を築いている。彼らは友情をこの上

なく純粋に愛していること、そしてどのような状況でも助け合い、お互いを守る以外には何も望まないということを私に信じさせようとしていた。愛の素晴らしさを誇張し神を完全に愛することを学ぶために、彼の創造した清潔でなく欠陥もある愛で愛する必要があると述べていた。純粋な人々のみを楽しませようこれら全ての会話は、とても大きな罪を美德の色に染めるよう努力していた。この粗野な愛はそもそも東地中海で共通性があり一般的に欠点であるためにこれを擁護するものが現れたり、一種の道徳的な様相を帯びたりしてくることも一般的である。(p. 71 1段落)

ペルシャの詩

イラン人が書いたすべての繊細な詩をもたらしたのもこの罪である、また美しい若者について語り彼らに大変心が奪われているように見えなかったとしたら、トルコ人との楽しい会話の大半をあなたはできないであろう。スルタン自身でさえもしばしば心を小姓に捕られ恋人や感情の奴隷となる。無能で仕事をできないほど能力のない人物でさえもお気に入りの人の忠告には耳を貸すものである。(p. 72 1段落)

スルタンの激しい愛情。ムラド4世のお気に入り。

ムラド4世はビュクオダの小姓であったアルメニア人のムサにこのような恋をした、そして彼にとっても心を奪われ、時には狂ったような状態にまでなった。さらに若い太刀もちのパシャ(人々の中に出るときにスルタンの刀や武器を運び、宦官長に次いで宮殿でほとんど最高位にいる小姓である)にも恋をした。この小姓の美しさを気に入り、ガラタサライの兵営から引き抜いたのである。まずはスルタンの好意によりハスオダに入り、非常に短期間で太刀もちパシャにまで出世した。(p. 72 2段落)

現在王座についているムラド4世のお気に入り

今現在王座についているスルタンはギュルオール(Güloğlu)という名のイスタンブルの若者に恋をしている。スルタンの音楽小姓であるこの人物は現在彼のお気に入りであり、彼には帝国の最重要の位のひとつでありほとんどディヴァーンの議長と同等の地位である宰相の位(クッベベズィーリ kubbe veziri)が与えられている。(p. 72 3段落)

女性の同性愛

東方世界の人々のモラルの崩壊はただ男性のみを墮落させるだけにとどまらず、女性もしばしばお互いに恋に落ちる。宮殿やハレムにいる特権階級の女性たちは、若くて美しい女奴隷を喜ばせられること全てを行う。彼女たちの顔にファンデーションを塗ることや衣類を整えることをとても喜び、そしてしばしば贈り物をする。さらにこの口やかましい女性たちは女性たちを満足させるために機会をうかがい、女友達と寝るために思いつくだけのすべての方法を試す。(p. 72 終わり)

私は彼女たちが感じた満足の程度を知らない、しかし聞いたところによると完全な満足を感じることができ、そして男たちから得る喜びに匹敵しうることを主張した。この種の関係はトプカプ宮殿では絶対に禁止されていた、そして白人宦官が小姓たちの振る舞いを観察していたように、黒人宦官が女奴隷の行動を常に見張っている。禁止する理由は、スルタンが会いたいと望んだ女奴隷がこの種の不道德な関係で失うかもしれない処女性を間違いない確実なものにするためである。(p. 72 4段落)

2つの愛に与えられた楽しい罰

小姓たちがお互いに書いた愛のノートに関するとても面白い話を聞いた。そしてあなたに話したとしても私に腹を立てないと思っています。ある日とても厳格で地中海式の恋愛を全く望んでいない小姓が、ある友人から彼に顔を向け恋人となることを認めれば返礼として銀貨 10,000 枚を与える約束をする旨を示す手紙を受け取ると、長たちのもとへ行き文句を言った。これほどの大金にもかかわらず名誉を守ることを優先した若い小姓のこの立派な行いや美德に感動した長たちは、前述の約束された金を彼に与え、罪人を鞭打ち 500 回の刑に処した。このようにして美德を賞賛し罪を罰した。しかしこの罰は求婚する情熱を防ぐことができず、鞭打ちの原因となったことに対してまったく憎しみを感じていないかのように会うたびに彼から与えられる全ての困難を喜んで乗り越える準備があることを示した。この恋にどれだけ執着したかという、相手側に自分のいうことを聞くことや自分のプレゼントや助けを受け入れることに慣れさせ、ついには彼がこの愛を望み彼に期待を与えざるを得ないようにした。事がここまでするとアーたちは何が起きているかに気づき、恋のしつこさから影響を受け、恋に身を任せるようになった小姓に対して怒ったアーたちは、彼が受けた全ての贈り物を返すよう宣告した後失脚させ宮殿から追放した。男性たちからも女性たちからも生まれるこの粗野なものに関してはもうこれくらいにしておきましょう。この不条理さであなたの頭を痛くさせるのは十分でしょう、そして宮殿の設計図で記された数字に関する説明を続けるときが来たに違いない。最後の 20 番は、遠征部屋である。ここのバシユアースが洗濯係長であることは述べた。この次の位にはハمام長がいる。彼の仕事については、21 番のハمامを説明するときに言及しよう。(p. 73 1段落)

トルコ音楽

もうひとつの長は楽団長(sazende başı)である(トルコでは音楽を古い方法で演奏し和音をつかわない、そのようなこの学問を使うことを知らず、我々のような演奏会の方法を全く使わない)。彼の唯一の仕事は、スルタンが音楽を聴きたくなったときに演奏家たちに付き添うことである。この称号により彼はハスオダの玄関にきて、門を開けさせることができる。他のものが演奏するときは彼は付き添わないほどだ。楽団長の仕事は通常外国人の改宗者に任される。この理由は〔彼らの音楽が〕我々の和音を使わない賛美歌として呼んでいるものに似た形式で、音の起伏のほかに規則を含んでおらず、新しい規則を作り出すこ

とができる経験豊かな人物は何度も外国人改宗者の中にあられたからである。もっと下の位には授業をこの部屋で行っているカルファ(kalfa)がいる。カルファーたちは一般にもっとも有名な演奏家、算術家、詩人などの中から輩出され、食事をクチュクオダで宦官長たちとともにとる。(p. 74 1段落)

算術

トルコ人たちの算術に関しては、形は我々のものとは違っていても同じ価値を持つ数字を使うことや我々のこの科学に適した規則を彼らも完全に実行していること、数字を文字の様に右から左に書くのではなく我々と同じように左から右に書くことをあなたに説明することは、突然関係ない話題に飛躍するということにはなりません。突然 10 ほどの数字を以下のように書く。

(文章の紛失)

この遠征部屋のもっとも位の高いものたちは白人宦官長の召使や助手をする。鍵もちの小姓、手洗いを助ける peşkir 小姓や水差し持ち小姓、このほかにも多くの小姓がいる。

(p. 74 2段落)

ハمام

21 番はビュクオダやクチュクオダや遠征部屋にいる風呂番たちが一日中いるハمامである。この者たちは小姓の体を洗ってきれいにしたり、髪を剃ったり、ケセで磨いたりする仕事を負っている。(p. 74 終わり)

アルズアーたちは金曜日、ハスオダのものたちは土曜日、宝物庫の者たちは日曜日、宦官長は月曜日、遠征部屋の者たちは火曜日、食料庫のものは水曜日、ビュクオダは木曜日の午前、クチュクオダは木曜午後には風呂に入る。鷹匠部屋の者たちは他の部屋のものとは分けられた日はない。あるものは宝物庫のものたちと、他のものは食料庫のものたちとともに入浴する。

(p. 74 3段落)

トルコのハمام

これほどの大人数が同時に入ることができるハمامがどれほど大きくなくてはならないかという問題について、ひとつの結論に至るでしょう。上はモザイクで飾られて下は大理石の床を張られた壮大なドームの空間には 300 人を収容することができる。隣には無数の小部屋がある。いくつかは体を洗うために 4, 5 階の高さのぬるいお湯で満たされている、いくつかはもっとも権力のある人物が特別の別室として使う。いくつかで髪を剃ったり、いくつかで水槽に水やお湯を注ぐ蛇口があるところから体を洗うためや石けんで洗うために水を好みの熱さに調節したりすることができる。建物全体は絶えず暖められ汗をかくのに必要な熱さに保たれている。(p. 75 1段落)

スルタンのハمام

スルタンは女奴隷の区画に自分用の特別なハمامを有しており女奴隷が彼へ仕える。しかし今日ではスルタンが青年の年に達するとこの zerafet を辞めてハスオダにある小さなハمامで体を洗う。ハمامのバシユアースは、2人の astı を従えたハمام長である。

(p. 75 2段落)

ハمامのいい効果と悪い効果

トルコ人はこのハمامがとても健康的であることや、痛風や胆石のような病気やもっと危険な多くの病気をハمامに入ることによって避けられると信じている。実際に彼らの間ではこれらの病気にかかる人は我々よりもとても少ない。ハمامでは汗をかく。その後体を洗うためにぬるい湯を浴び石けんで体を洗う、男たちは髪の毛を剃り、女性たちは ağda yapar. 体からこれほど多くの汗をかくことはとても悪い影響があり、お腹の肉がぶよぶよになることである。特に女性たちは胸の美しさや初々しさを短期間で、さらに結婚適齢期が少し遅れようものなら結婚することなく失ってしまう。しかしこの不運をかなりの利点でもって埋め合わせており、もしあなたが我々の母国の女性たちに話さないほど慎重であることを知っていれば、これをあなたに打ち明けたでしょう。(p. 75 終わり)

そうでなければ女性たちは帝国の全ての建物の建設を止めて壁職人の全てを自分たちへハمامの建築の仕事へ走らせるでしょう。(この秘密を知る)必要がある人に(女性の多くはそうなのですが)、この効力を話すのは私に感謝してもらえよう帰国するまでとっておきましょう。トルコではハمامはただ健康を守るためや体を清潔にするためだけではなく、預言者が多くの理由のために命じた、魂の清めに有効なグシュル(全身の清め)がより快適に行われるためにも使われる。

(p. 75 3段落)

トルコのハمامの建築

このハمامの建物は、çok bol miktarda serpiştirildikleri トルコの都市の重要な装飾である。ほとんどは大理石からできている。全員服を脱いだり着たりする大部屋はドームで覆われている。暖められ汗をかく場所のいくつかは大人数でも入れるようにとかなり大きく、いくつかはひとりで洗うことを希望するものたちのためにより小さく作られている。無数の窓が開けられたドームに覆われたこのハمامの全ては、多くのお湯や冷水の水槽や湧き水で満たされており、隣には髪を剃るために入る多数の小部屋がある。建物の外ではこの美しい建物の素晴らしさを作り出している造形は、内側から見られるものもとても目を楽しませる。

(p. 76 1段落)

音楽部屋

22番はメシュクハーネ(meşkhane)、つまり音楽を教えられる部屋である。一日中開けられたままであるこの部屋は夕方になると閉められ、誰もその中で寝ることはない。何人かの

演奏家が稽古をつけたり授業をしたりするためにこの部屋に入る。 (p. 76 2段落)

室内楽

音楽には2種類ある。ひとつは家の音楽つまり部屋の中で聞かれる音楽である。もうひとつは とても騒々しい、戦や屋外で聞くのに適したメフテル音楽である。家で聴かれる音楽の種類の教師は宮殿の外、つまり自分の家で生活し朝9時ごろ、ディワーンの最初の会合が始まるやいなや音楽部屋に来る。そのとき各部屋にいた音楽小姓が部屋から出てきて先生の向かいに座る。(p. 76 終わり)

その後時には一人ずつ、時には全員で単音の音楽を演じさせる。ムラド4世の時代には宮殿にとっても素晴らしい有名なイタリア人の音楽の教師がいた。ベルベル人がスルタンへこの教師を献上したらしい。 (p. 76 3段落)

音楽の和声を好まない。トルコ音楽の形式

私はイタリア風の、私たちがやるような調和の魅力をスルタンに示すために、皆で合唱することにより和声の学問の全ての基礎を用いてある歌を作曲した。そしてお互いに調和のとれた多くの楽器で演奏される歌も作った。この研究や繊細さは、ムラド4世のような戦士の耳には喜ばれないほど進んだものでありスルタンは前述の作品を女性にのみふさわしく、この音楽を優しすぎて女っぽいとみなし全く敬意を払わなかった。彼はトルコの古いリズム形式をより好んだ。トルコのやり方では演奏は音律の知識だけからなり、楽器は全く楽譜を用いずこの旋律によって演奏される。Murabba や kar、nakş、sema'i という名の美しい曲では音楽のテンポや長さは小さなダヴルで示される。 (p. 77 1段落)

全ての音楽に雰囲気の種類によって変わる24種の拍のとり方がある。これらは詩の長さや短さによって用いられる。Teshbih, ilahi, tes'id などの名前を与えられた賛美歌で体を前後にゆすったり膝を叩いたりしてテンポをとる。 (p. 77 2段落)

トルコ人は音楽を楽譜に記すことを全く知らない

彼らには音楽を楽譜に記すことは素晴らしく驚くべきこととして見られている。そして音楽を読んだり書き表せられたりすることを想像もできない。この都市で知り合ったものの一人が、宮殿に入る前にイタリアで楽譜について学んだ、そしてスルタンに音楽の分野で仕えていた。教師から学んで楽譜に記した楽曲を何ヶ月も後に、他のものたちの大半が忘れた頃に、楽譜を見ながら正しく演奏することができるので彼は尊敬を集めた。自分に名声をもたらしたこの技術は教師たちからも賞賛され彼へ erbaşı またはコーラス長という称号を与えた。いくつかの歌の歌詞や makam などを忘れたほかの小姓たちは彼を頼り、ノートを開けて、記憶を新たにするために歌を歌うことや演奏するよう頼んだ。(p. 77 終わり) 彼も一方ではこの手伝いを好んで行い、他方ではこれを習得するためには長い時間が必要

だとの言い訳を前面に押し出し技術を彼らに教えたがらなかった。実は名前が余計に広まることや小姓の教育にとって必須にされることを恐れていたのである。なぜならそうなれば自由を手にすることがとても難しくなるであろうし、おそらく生涯を奴隷として過ごすことになるであろう(と考えたからだ)。(p. 77 3段落)

民謡

人々の間に広く広まっていて **makam** がほとんど皆の耳に馴染んでいる歌を民謡(*türkü*)という。そしてこれらの主題はほとんどの場合国の戦争や勝利、愛や痛み、喪失などである。ウレマーや教養のあるものは前述のムラッバや特にペルシャ語で書かれたほかの歌に価値を置いている。民謡のほうはというと無知なものや大衆が好んでいる。民謡は **Pont-Neuf** のシャンソンにとっても似ている。この国の美しい歌のいくつかを教えることによりあなたを喜ばせることができるでしょう。このために2つの歌の楽譜をプレリュードとともに書き記した。これをパリの音楽家に教えることができます。トルコの音楽が大いに粗野なものであるという話題において私と同じ考えを分かち合うだろうということを確認しています。(p. 78 1段落)

Re sol ut fa veya rast makamında peşrev

[Metinde boş bırakmıştır]

この4つの詩は以下のようにフランス語に訳される

“あなたの顔を彩るチューリップの色は、私をこんなにも変えてしまった。あなたを一目見て、あなたに一目見られたいという思いでいっぱいになり、この色は私の心を揺り動かす;あなたは私を病気にした、一体どうなるのだろうこのように美しく優雅で、背の高い人の隣で、その足の下にしかれる(絨毯)になるほかに何ができようか”(p. 78 2段落)

Semai

[Metinde boş bırakmıştır]

この歌はフランス語で以下の様に説明される;

“私の心臓、高貴さ、魂、私の美しい口ひげがあなたの顔を焼いた;私の美しさが、あなたが私を見ることを恥ずかしがらせるのでしょうか。私の高貴さ、魂、柳眉、美しさ、あなたの顔を輝かせるのは何なのか、見せてくれ、ああ魂よ、心よ、もうやめてくれ;美しい、笑顔で私をしからないで;ああ私の心よ、心臓よ、愛しい人よ”(p. 79 1段落)

この優雅な歌の伴奏をするときには一般的に以下のような楽器を使う。一種小さいヴァイオリンであるケマンチェである。ヴァイオリンの弦から作られた3つの弦が張られた一種の小さいギターであるタムブルもしくはシェシュタル(取手がとても長く、音や半音を出す

ために多数のフレットがある)。この楽器は指では演奏されず亀の甲から作られたばちや鳥の羽を使って演奏する。サントウル、ミスカル、ネイやリュートも用いられる。türkü と名づけられた民謡の伴奏をするときには他の楽器も用いられる。チャーナやチョウル、タムブラー、テルタムブラー、チェシテなどである。これらは様々なかたちで用いられ、一般的には3弦の楽器である。(p. 79 2段落)

トルコの詩人。トルコ語の詩の韻律。単語の性

トルコにおいても、宮殿で即興で詩を作ることに誇りを持つものやその場で作った詩を読む詩人がたくさんいる。詩の韻律や調和はアレクサンドルのものに似ている、つまり12の音節があり常に精悍な韻を使っている。なぜなら男性形・女性形のない、接尾辞を名詞の様に使うトルコ語では女性形というものがないからである。(p. 79 3段落)

ラッカス(rakkaslar)、ムカリット(mukallitler)

踊りをする小姓をラッカス、道化師役の小姓はムカリットとよばれる。この者たちも午後3時から夕方にかけて音楽部屋で練習を行う。一般的にハスオダの音楽家に付属している。彼らはダンスをして、タンバリンやゼンムル、カスタネットを鳴らす。(p. 79 4段落)

軍楽の楽器

夕方頃になると部屋に戦争や遠征の音楽〔メフテルハーネ〕の教師が来る。彼らは授業を行う。楽器は様々なトランペット、横笛、ダヴルやシンバルなどから構成され、尋常でない不快にする音を出すために有効である。これらの楽器は彼らの言葉ではズルナ、ボル、アヘンキやリズムを刻むために使われるダヴル、リズムによって互いに叩かれる多くの銅版から作られたナッキヤーレ、クドウムベレキまたはドウムベレキ、ジルなどと呼ばれる。スルタンが人々の前に出てくるときには馬の上に乗せられた青銅のダヴルが鳴らされることが教えられている。(p. 79 5段落)

ダヴルやボル

このメフテルの楽団員の幾人かは宮廷の外にある部屋で生活しており、日が昇る1時間前に nevbet を鳴らしスルタンを音楽の音で挨拶をする。日が落ちた1時間半後にスルタンにお休みの挨拶をするために宮殿に連れてこられる。さらにラマザン・バイラムを知らせるためにも用いられる。スルタンの華やかな騎手の大群とともに外に出るときに彼に同行してバイラムのときに外国の大使たちを音楽でもてなす。ちょうど戦場に行きかう外国人たちをボルやダヴルで迎えるように、スルタンが人々の前に出るときにカフタンをお与えになる人々を歓迎する仕事も担った。カフタンを贈る理由は昇進などやスルタンが彼らに慈悲を与えざるを得ないその他の理由によるものである。音楽家たちの目的は小さな贈り物とともに銀貨をいくつか手に入れることである。(p. 80 1段落)

保安長。イスタンブルの夜の番や巡回

何人かはイスタンブルのいくつかの塔では日が沈んだ2時間後に就寝を知らせる角笛を鳴らす。ついに保安長が仕事をするときが来た。保安長はおおよそ警察官や巡回する騎士のようなものである。年に生活する皆を逮捕したり投獄したりする権利もち巡回を始める。彼らは夜に起こる火事や事故を予防する義務を負っている。音楽家は日が昇る2時間前に起床の角笛を鳴らす。幾人かはバイラムの前夜祭に小姓が絨毯を運んでいるときや、パシヤの称号を与えられた元小姓が宮殿から出るとき、スルタンが小船で周遊に出るときや仕事をするときなどにも演奏する。(p. 80 2段落)

護衛長

同時に船乗りの仕事についている護衛兵たちがオールをこいでいるときには2人の小姓が手にズルナやナッカレを持ちスルタンを楽しませる。(p. 80 終わり)

護衛長はガレー船つまり *çekdiri* で舵手を務めるためにスルタンの後ろに立ち彼としばしば会話をする機会を持つ。この親密さやスルタンが自身に気軽に耳を傾ける特権ゆえにこの仕事はとても重要視されており、護衛長がこの機会を利用して良いことや悪いことを行っていることを知っている帝国の高官たちは護衛長を軽蔑したり尊敬したりする。スルタンが皆の振る舞いに関して彼から知識を得始めることは彼に最高の位への道を開くものである。もっとも身近な位は海軍提督である。(p. 80 3段落)

室内音楽

室内演奏家たちは通常毎週火曜日にスルタンが髪の毛を剃るときスルタンの御前で演奏しに行く。御前に出なくてはいけない決まった日はない。しかしスルタンはしばしば彼らをハレムの部屋に呼び寄せる。演奏家たちは美しい王女たちを見ることがないように目隠しをしながら演奏し歌を歌うことを強制された。隣で待機する黒人宦官長たちは、音楽家たちが頭を起こすことを防ぐために常に彼らを見張り、顔を少しでも正面に向けたならば彼らの首を拳で殴ったり平手で打ったりする。この状態で音楽を演奏し、このような出会いでの場で王女たちを見る喜びを奪われることがとても退屈で不快であることをあなたも認めるだろう。このためハレム部屋では一般的に女奴隷や黒人宦官のほかには音楽を演奏しない。演奏家へは数多くの王子のうち一人が割礼を行うときに仕事をさせる。なぜなら王子が眠ることを防ぐために時々演奏することを強いられていたからである。そのとき王座にいたスルタン・メフメドの割礼が行われるときには演奏家たちは彼が寝ているハスオダで12日間全く眠ることなく、あるいはただ順番に短く区切りながら調和の取れた音楽を奏で続けた。王子に様々な面白い寸劇を見せている間にのみ休むことができる。王子はこれ以降調和の取れた音楽を全く好まず、宰相 *Köprülü Mehmed* の提案や忠告に従って狩りに夢中になった。そのときまだ仕事の長にいたこのお気に入りの宰相は、スルタンの軍隊の

長になり王位をすばやくのつとめるために間もなく **Kangiya** へ行くらしい。この宰相は、スルタンの血を流す好みを他の面に向けること、残酷さを帝国の都市ではなく森で完了するように指図するために彼へ野獣と戦いたいという要求を持たせるよりもいい方法を見つけることができなかった。(p. 81 終わり)

この宰相は政府の支配を、この地位についていた父の政治と全く反対の方向で8～9年間手にしていた。なぜなら彼の父が地位を守ることや市民を従順にさせる問題で知っていた唯一の解決策は、目に余る昇進や嫉妬を感じる事が起こりうる人物の頭を切り落とすことであった。自分に反抗しうる勢力を他人に作らせるようにシパーヒーとイエニチェリの小競り合いを絶えず扇動していた。イエニチェリの力を後退させる。反逆を起こすことや、傲慢さによって帝国の長をもう二度と **çorap öremeyecek** 状態にするため思いつく限りの全ての解決方法を適用した。なぜならこの横暴さがそのような点にまで到達した、兵士たちが今日のスルタンの父であるスルタン・イブラヒムの死にも関与していたために、スルタンの生命を支配するようになった。もしこの強烈な傲慢さを制限して整える人物が現れたら、まさにローマ帝国の崩壊期に見られたように、帝国は手をつけられない状態になった。この宰相が、宰相職にあった5、6年の間に3万人を殺害したことが確実に目撃されている。息子のほうはというとやわらかい支配を適用しており人々を簡単に許している、しかし頭を切る代わりに金貨の袋を出させて何年も集めたものを一晩で没収することに満足している。極度の貧困や欠乏がただお金の力でもって成功をおさめようという大きな野望に力を残さないことをよく知っている。とても若くして最高位に昇りつめた。20歳で大カイロパシャであった。そこの人々を、この仕事で経験を積んだ年長者でも示すことのできない賢明さや注意深さによって支配した。父の死によりスルタンの手から帝国の印を受け取ったときはたった27歳であった、そして突然このように素晴らしい王室の管理の仕事をした。支配を始めてからは敵はいなかった。正反対に、特に賢く若い司令官として自身を気に入らせようとする軍人たちの間で多くの友人を作り有名になった。ここから始まり彼の頭の良さや支配について判断を下すことができる、これほど若くしてこれほど多くの人を満足させることができるならば、時の流れの中で政府の仕事においてもっと経験を積むと才能や政策から何が期待されるかを予測できるでしょう。この宰相は背が高く美しい顔立ちだ。顔は陰鬱で悲しそうである。(p. 82 終わり)

肌は黒く、目は小さくくぼんでいる。この素晴らしい宰相について述べるために話題からそれたといって、解決するよう私を叱らないでください。説明を始めた話題に戻しましょう。スルタンが狩りとても夢中になり狩りが彼の目下唯一の娯楽となったほどである。彼は金や銀の鎖でつながれた5000～6000匹の犬を飼っている。一番のお気に入り好きな犬は金や真珠、他の宝石などで飾られた首輪をつけている。この大規模な狩りの装備はスルタンごとによって異なる、そして王子がこの娯楽を好むかどうかによって増えたり減ったりする。トルコ人たちは犬の面倒をととても良く見ており、走らせに連れて行くときには上を屋根で覆っている。むかし、スルタンは狩りにでかけると、かなりの数のキリスト教徒

をその家族から引き離して、(スルタンの)あとから付いてこさせた。そして、大きな森を、ぐるりととり囲ませた。そして、じょじょに、輪を狭めさせた。それから、輪のなかにいる動物たちを、その人の輪を突破して逃げるように仕向ける。こうして、多くの人々が亡くなった。(p. 81 1段落)

ムラド4世は男子たちと会話をするとき、スルタン・イブラヒムは女奴隷とともにいるときに音楽を聴くことをとても好む。実際に女性の要求を満たし青年たちよりも好んだスルタン・イブラヒムは、鷹の我々を感激させるより論理的な状態にある。

23番は、宝物庫部屋の前にある、中で金や銀の重さを量る区画である。

24番は、宝物庫部屋である。宝物庫部屋の全ての小姓たちは長から命令を受け衣類や高価な毛皮を手入れして綺麗にしたりほこりを取ったりするためにここにくる。スルタンの衣類を年に2回日干しする。最初のオスマン朝のスルタンの色とりどりに染められた短い巻き毛の羊の生皮と長い毛の(ほかの)生皮から作られた古い衣服もここで厳重に保管されている。これらの古い püskü 衣服は、聖なる物であるかのように現在のスルタンに示される。宮殿の庭は完全にアーチで屋根がかけられていて、そこは大きな倉庫の役目を果たしている。どのスルタンも量を変えた特別な宝をここで守っている。この宝物庫はスルタン自身の印によって錠をかけて封印され守られている。(p. 83 1段落)

トルコにおいて財務がどのように管理されているかを説明することなしに、スルタンの宝物庫部屋を去りたくはない。ハラージュもしくは全ての県から一人ごとに取りられる税の大半は、せりで最も高い値をつけたものに渡される。(p. 83 終わり)

この人は、自分のポケットからお金を支払って税金を集め、せりの代金を決まった期間で現金で払うことを強いられる。ティマールは、毎回の送金のために委任を受けた収税吏によって集められる。収税吏は農産物を数え、イスタンブルに住み毎日宝物庫へ入るもの記録したデフテルダール長へ車で送ることを義務付けられている。彼へ割り当てられた量も自身に支払われる。全ての県でティマールを財務官が管理しており、それぞれの県内のパシャやサンジャックベイに支払う。ティマールから来たお金を彼らに明け渡し、彼らもこのお金の一部を自分の管理下にある兵士たちの給料を支払うために使う、残ったものをデフテルダールや財務官へ運ぶ。これらは毎年ディワーンに提出するための収支目録を用意する、そして年末に手元に残った現金を宝物庫へ運ぶ。(p. 83 2段落)

6月、7月、8月の間には、スルタンにとってあまり必要でないものや宝物庫の財産である古い衣類とともに、死刑つまり絞首刑になったパシャや他の役人の押収された財産が宮殿で競売にかけて売られる。宝物庫のテッラル(tellal)と名づけられた6人の小姓は、財務庫の秘書官が自分たちへ運んできた前述の衣類を手にとり他の部屋の入り口まで持って行く。各部屋のテッラルはこれらを数えて受け取る、そして競売が始まるまで小姓たちに展

示する。小姓たちはカフタンや刀、馬飾り、ターバンなど気に入ったものを買う。しかし室長たちに到達することなく大金を集めることは難しいので、本来の商売はベゼスターンと関係した宦官長が行う。ベゼスターンの商人が彼らが買った商品を町で利益を上乗せして小売する、そして料金を金庫番に払われることが必要なときはお金を時間内に保証できるような水準に設定する。イスタンブルのこのベゼスターンは、中は店で満ち様々な種類の価値のある面白い商品が売られている、上を屋根で覆われた多くの通りがある閉ざされた場所である。町の商人の長たちが仕事をしている市として考えることができる。しかし実際には商売は火曜日と木曜日に集中して行われる。日中開かれているこの場所は夜には閉ざされ中には誰も残らない、全ての商店を閉めた後全ての商品を門番の善意にゆだねて家に帰る。さらに帝国では商品を信頼できる場所へ運び管理の下においておきたい人々は皆、銀行へ寝かせるように全ての財産を全く利幅をとらずにベゼスターンを管理しているものたちの善意へゆだねている。(p. 84 終わり)

商人が長い旅へ出る必要があるときには、財産をゆだねることができる信用する人物を探し出す必要はなく帰ってきたら商品を残したときと同じように見つけることができるほど安心してこれを利用している。ほとんど全ての商人と町で最も興味深く、最も裕福な手工業者はベゼスターンの近所に住んでいる。(p. 84 1段落)

25番は宝物庫である。この部屋は人数が90~100人の間で変動する宝物庫の小姓の部屋である。長は、夜はここで眠り日中は26番の特別な部屋へ出かける宝物庫カフヤーである。古い衣服を繕ったり、銀を溶かしてもう一度固めるために招かれた職人たちもこの部屋にいる。宮殿から少し前に出て行った多くのものは自分が宮殿にいたとき、帝国〔オーストリア帝国〕が、大使のSchmittを通して送った贈り物、アウグスブルグの最も優れた職人によって金や銀でメッキしたトレイやカップ、皿、大きな銀のたらいとともに多くの貴重な品々がお金を作るために鑄塊の状態で叩き棒の状態に固められているのを見たことを伝えた。もっと前にはスルタンたちが多くの宝物もベネチア戦争の需要を満たすために消費されたらしい。その人は、宝物庫の扉を開けた後さびたクルシュやシッケで満たされた箱が外へ出されること、これらを新しい袋へ詰め替えられ、小姓たちが宝物庫のカフヤーの絶え間ない監視にもかかわらず引つつかんだお金でポケットやブーツを満たしていたことを説明した。(p. 85 1段落)

世界の大半が考えているのと反対に、トルコ人たちがそれほど恐れさせるような強大な力を持っているわけでも無尽蔵な富を持っているわけでもないことがわかるでしょう。けれども大きな忍耐、慎み深さ、重労働への親しみ、強烈な覚悟が全てをうまく扱うこと、特に陸上戦においていつでも予備兵や援軍が送られる可能性があること、確実に敵を打ち負かす。そもそも兵士を集めるために使う先祖伝来のやり方は軍隊に対して常に多数の志願兵たちを伴わせていることである。なぜならティマール分与は、生きている限り望まれたと

きはいつでも徴兵の義務に答えることが課せられているからである。このため軍に従う無職の者たちはティマールのシパーヒーたちが殺されることを期待しており、すぐに彼の地位を要求してこの地位へ就く機会を見張っている。全てのシパーヒーは分与の獲得の文書を身につけていなくてはならない。(p. 85 終わり)

シパーヒーの地位を狙うものたちは、殺されたシパーヒーの勅令を得られるよう戦において彼らの後を追う。一般的にティマールはこの勅令を持ってきたものへ与えられる。さらにこれら全ての原因は人々の利益にならず、戦が長引いたときには志願兵として名乗り出るものが減ってしまうことを避けられない。トルコ人たちはカンディー(Kandiye)の包囲攻撃に入ったとき以降、帝国で徴兵する男を見つけられないために兵士不足となり新しい軍を編成できないほどである。誰もが海戦での力は陸地戦ほど強大でないことを確信している、なぜなら海への恐怖は陸地戦での危険よりもずっと恐ろしいからである。しかしスルタンはいつも多くのガレー船や他の軍艦を準備している。船乗りや造船において経験があり賢明なものがいたならば海においても強大な力を手にしていただろう。実際には造船技術を知っている職人たち、さらには改宗者もいなくはない。造船所は常に様々な種類の予備の材料でいっぱいだった。港の周りには材木に適した森がある。イギリスは鉄や他の材料を提供している。帆のためにとても大きな亜麻布もある、必要なときは Aumale 布も事欠かない。にもかかわらず海軍力を蓄えるのに適した政策は優れた船員や青年船長を得ることができない、なぜなら政府は全てのガレー船の船長と合意をして奴隷のこぎ手たちの需要を満たすためにエーゲ海の島々の様々な島や他の場所のティマールやハラージュを彼に与える。このため、戦争で 50、60 人の奴隷を失った船長は自分の財布からお金を出してあるべき場所へ新しい奴隷を買わなければならない。このことは彼らが臆病であるからではないとしても、けちさ故に戦いをできるだけ避けようとするのを強いているからである。なぜならこうすることによってのみ何年も苦勞して集めた一日で失いたくないものたちや土地を守ることができるからである。このため全ての船長は敵と対立することなく逃げ、時には上陸をしないつもりで船に乗せられたものの部隊をできる限り危険に晒すことなく移動させるよう面倒を見る。戦争が不利になるとおのおのが自分だけを守ろうとする、互いの助けにはあまり駆けつけないので戦争に負けてしまう。我々の数少ない船でさえ彼らを怯えさせ最も大きい艦隊の間からでも逃げることができる道を見出すことができる。(p. 86 終わり)

実際に海軍提督が海へ出るときに出された絶対命令ゆえに指揮にあたってそれほど自由が利かずに作戦を変える必要がある状態や敵に対してもっと攻撃をする必要があるときにおいてさえも出された指示に盲目的に従うことを強制されている。このため通常は適した機会を逃し避けることができた嫌な衝突に突入してしまう。(p. 85 2 段落)

宝物庫の書記官やスルタンの衣類とともに宝物庫の古い衣類を綺麗にする小姓たちのもとへお湯を運ぶ güğümcübaşı はこの宝物庫のもう一人の長である。(p. 87 1 段落)

27 番は食料庫である。食料庫の小姓の数は 70 人や 80 人である。長は食料庫カフヤー(kiler kahyasi)という。この小姓たちの仕事は、砂糖やジャム、シャーベット、あらゆる種類の食料雑貨、大カイロから送られてくる香料や香水、またはワラキアの蝋燭などが置かれているたなを綺麗にすることである。さらに毎晩宮殿の全ての部屋へ燭台を配る。スルタンが食料庫の何かを望むとハスオダにいる小姓の一人を送りカフヤーへ知らせる、そしてカフヤーがすぐにスルタンの望んだものを持ってくる。28 番に、食料庫カフヤーの小さな自室がある。日中はそこにおり、贈り物としてもたらされたものや、もしくは購入して食料庫に持ってこられた商品を受け取る。(p. 87 2 段落)

29 番も食料庫の一区画である。上には前述のものやさらにはあらゆる種類の菓やジャムがここで保管されている。(p. 87 3 段落)

30 番は、2階に上を覆われた大きなテラスのように前へまっすぐな張り出しのあるキョスクである。キョスクベクチシと名づけられたこの場所から庭へ降りる。ここでただ土を耕して庭を手入れするだけではなく、警察の仕事も行っている護衛兵たちの番所もある。このため護衛兵たちには帝国のほかの軍のように自身の中に整備された指揮官や長がいる。スルタンを謀反から守ったり、あるいは敵の急襲があれば町を守ったりするために宮殿の庭園やイスタンブル周辺の別荘に散らばっている 7000~8000 人の護衛兵を瞬時に呼び寄せ兵役につく。この護衛兵たちには兵士や弓術家、水兵もいる。スルタンが王家の小船で周遊に出かけるときにオールを漕いだり、夜には小さな漕ぎ舟に乗っていかなる詐欺も行われていないかどうか調べたりするために港で巡回する。(p. 87 終わり)

日中かというと税関から密輸や町の安全を壊すようなことがないか見張り、女性たちが海岸で恋人と会うことを防いだりするためにイスタンブルの周辺を巡回する。さらに警察の長や重い罰の審判員としてイスタンブルの隣人であり、護衛兵長の管轄下にある村で見張りをして警察の仕事をする。イエニチェリで教育されたこの護衛兵たちは帝国のほかの位へ一步一步あがって行く。(p. 87 4 段落)

このキョスクはトルコで最も楽しい建物の種類であると言うことができる。海や小川の岸や、特に庭園の中で、泉に近い場所へ作られたこのキョスクには八角形や六角形の外観の全ての面に大きな開けたサロンがある。このサロンはたくさんの円柱の上にある。夏は涼しくなるようにと日の当たる面にある空間が滑車で上げ下げされる大きな薄い布で覆われている。床は一般的に大理石が敷き詰められている。サロンの真ん中や様々な角にあるパイプから運ばれる水はたくさんの小さな水路によってサロンの四方を巡っている。座るために権威を高める豪華な絨毯や、最も美しいイランやベネチアの布で作られたクッションで周囲を囲まれている。板張りの天井は金箔で塗られ、空の青色で塗られた場所には花や

動物は描かれていない。生きたものを豪華な絵画や彫刻にすることが神に対する冒瀆であると信じているトルコ人たちはこの種の絵画を絶対的に禁止している。通常地面から5、6歩上にあるこのサロンはいつでも涼しい。帝国の全ての裕福な者たちの庭にキョスクがある。夏は夕食の後そこで眠る、空き時間には友人たちとともにそこで娯楽にふける。

(p. 88 1段落)

31番は、ハスオダもしくは職階級の最上位に属しているスルタン個人に仕えるために最も近くに控えている小姓たちの生活するハスオダである。今のところ、この部屋にいる小姓の数は40人である。上位4人はスルタンへ嘆願書を提出する自由を有しているのでアルズアの肩書きを持っている。これらの中から *silahdar paşa* は1日あたり100アクチャ、*çuhadar ağa* は80アクチャ、*rikabdar ağa* は180アクチャ、*tülbent oğlanı* は150アクチャを与えられている。スルタンが人民の間に出るときには常にこの4人のアーが追従する。常にスルタンの側にいるものの一人目は、赤い鞞の中に三日月刀を持っている。二人目はスルタンを雨から守るための服が入っている赤いかばんを持っている。(p. 88 終わり) 三人目は、スルタンが馬に乗ったり、降りたりするたびにとあぶみをとることを請け負っている。四人目は、他のターバンのなかから異なる見た目のものや *mücevveze* と呼ばれるターバンを運ぶ。この部屋のほかの小姓は全員1日当たり40アクチャをもらっている。

(p. 88 2段落)

この上位4人の下にいる最高位の12人の小姓たちは、腰帯に高官であることの証として金の鞞のなかにそれぞれナイフを帯びていたことから太刀持ち(*bıçaklı*)という称号を得ており、それぞれに別の仕事がある。一人目は、前述の部屋の扉の開け閉めをする鍵持ち小姓である。二人目は、スルタンの髪を剃る床屋長である。昔からこの小姓たちはスルタンの髪を剃るとき少しのお願いをすることを許されており、褒美をもらうこともある。しかし剃刀が喉元にあるときにこの種の要求を話されることを嫌ったムラド4世はこの習慣を廃止した。にもかかわらず床屋長たちは髪を剃っているときにスルタンと会話をしたり時には帝国で起こっていることに関して意見したりすることをやめなかった。ある遠征で、ケナン・パシャという名の海軍帝国が指揮する海軍がダーダネルス海峡でベネチア軍に敗北したということをムスタファという名のアルメニア人床屋長がスルタンに伝えた。ケナン・パシャの父である宰相はスルタンへこのことをあえてまだ知らせないようにしていたので床屋長にひどく怒り、友人のように優遇しているようにみせかけ彼に1つの県知事職を与えさせ、宮殿から出るやいなや首を絞めて殺した。上位12人の小姓のうち三人目は、スルタンが手を洗うように宝石をちりばめた水差しで、金の洗面器に水を注ぐ水差し持ち小姓(*ibrik oğlanı*)である。四人目は、スルタンが夕食の席につくときに彼の前に長いテーブルかけを広げる *peşkir oğlanı* である。五人目は、スルタンの磁器の椀を保管したり望んだ飲み物を差し出したりするシャーベット係である。現在のスルタンは水やシャーベットのほ

かには何も飲まない。しかし血をそそるようにワインを飲むことに夢中になり水を飲むことを女性たちへ任せていたムラド4世の治世には、杯を満たすサーキーと呼ばれる役職者が帝国の最も美味しいブドウの中から選び、瓶を自ら閉めたワインの瓶に入れられたバクホシュの水がいつも大量に置かれていた。六人目は、スルタンの夕食の席にテーブルかけを広げ、パンを差し出す給仕係である。このパンは特別な方法で調理されている。上面を軽く焼いた状態の硬い皮がなくとても白くてやわらかく、パン生地のように指でちぎって食べる。スルタンを食卓につかせたので、あなたに彼の食事について述べなくてはならないでしょう。

(p.89 1段落)

スルタンの食卓

スルタンはハスオダやハスバフチェで一人で食事をする。彼へ毎日提供される肉料理は、一般的には煮たり揚げられたりした小さく切られた羊肉や串に刺して焼かれた羊のソーージ、串で回された1組のハト、ピラフとともに調理された鶏肉や季節にはオーブンで調理された子羊の肉などである。さらに隣にはあらゆる種類のペースト状の菓子や、最も美味しいものでさえ我々の口にはまったく美味しいと思えない異質なものが与えられる。これらの菓子はバクラヴァや *me'muniyye*、牛乳で調理された米入りミルクの食べ物、砂糖ですりつぶされたピリンチェムハツレビというものである。そしてスルタンは水なしで飲み込んだ菓の後で、大きなカップで果物の飲み物、ブドウ、桃、アンズ、さくらんぼのようなあらゆる種類の果物のジュースを出される。彼が食事をするとき、小人や唾者が彼の前で様々な面白い出し物をする、スルタンもこれを楽しむ。彼らに食卓に持ってこられた食べ物のひとかけらを与える、これを得るために彼らが喧嘩するのを眺めたりする。夕食のテーブルにある容器の全てが陶器やその他の価値ある土から作られた *martabani* である。ラテン人たちが *murrynum* と名づけたこの土はインドからもたらされる。コップやスプーンは木製である、スルタンは指をフォークの様に使う。シャリーアは男性が金や銀の容器を使うことを禁止しているが、女性たちにはこれを許可している。シャリーアでは、この世で夫に従順であり忠実であった女性のみが天国で幸せを得ることができ、あの世でも夫が彼女たちを思い出した時には美しい天国で隣に置くであろうことを述べている。ムスリムの男性は天女とともに永遠の幸せを生きる、体を感じる全ての喜びを彼女たちと分け合う、魂もアッラーと面と向かっていることの恍惚の中に沈んでいるとき、いいことも悪いことも感じない、他の場所にいる不従順であった女性たちは男の天使の奉公を受けることはできない。女性たちは、あの世での大きな報酬をもらうことが期待できないので、この世でのあらゆる厳しい宗教的禁止を免除されている。人々は法律で悪であると定められたことをしないと条件で、賞賛されるべき行動をすることを強制されることはない。このようにアッラーへ祈りを捧げることやモスクへ行くことを義務付けられていないのである。このため王女達は何の心配もなく金や銀の皿で食事をする。食事が終わるとスルタンは小さな石けんで手を洗う、その後コーヒーを飲む。コーヒーはフランスでも誰もが話題にし

た事のある飲み物である。ソラマメの実に似た一種の大きな実から作られる、この実は前もってオーブンで炒られ、その後すりつぶされ沸騰した湯で調理される。(p. 90 終わり)
これが飲み物となると熱いうちにちびちびと飲む。体の酔いを醒ませて混乱した頭をすっきりさせ、頭痛を追いやり、さらにたくさん飲むと眠気を醒ます。最後にスルタンに竜涎香を塗り、火がつけられるととても甘くいい香りの煙を出すキャラの香を焚く。

(p. 90 1段落)

上記の長たちへ話題を戻そう。七人目はスルタンやハレムの女性たちが楽しく過ごせるよう教育された小さな犬たちの面倒を見るマストウジュ・アー(masticı ağa)である。

八人目は前述のアーの手伝いをするマストウジュ・オーラン(masticı oğlanı)である。

九人目は大カイロで育てられもたらされたオウムの世話をするオウム長(duducubaşı)である。

十人目は、スルタンのつめを切るつめ切り係(tırnakçı)である。

十一人目は、コーヒーを入れて差し出すコーヒー係(kahveci)である。

十二人目は角や鯨の髭から作られた爪楊枝を差し出すヒラルジ(hilalci)である。帝国の最重要な地位へ就かされることが期待され、一定期間の後に大きな県を支配することになる人物が従事していた仕事のうち私が特に面白いと感じたものはこれらである。

(p. 91 1段落)

この十二人の小姓たちや職階級の最上位にいるほかの四人はスルタンが他の男子たちと一緒にいるあらゆる集まりや食事のとき、または外出時などいつもスルタンの隣にいる。しかしハレムに入るときには、扉のところで彼から退出の許可を取りそれ以上は入らない。

(p. 91 2段落)

40 人いるハスオダの小姓のうちほかの 24 人は下士官であり、部屋のほかの単純で普通の仕事をしている。幾人かは 4 人のアルズアーの sandukçu である。スルタンは彼らに、県知事よりも低い仕事やパシャ、あるいは sancak beyi よりも劣る役職には就けない。さらに時には一特に支配に問題が多かったり、利益が少なかったりすると一特定の任務につくのではなく、新たに補佐的な仕事に回される。

(p. 91 3段落)

アルズアーや基本としては 4 人の高官の中の頂点に立つ太刀持ちのパシャは、いつも非常に高い位に任命される。ガラタのカラ・ムスタファ・パシャという人物は、殺害されたスルタン・イブラヒムの母である母后がなくなった後、はじめはバグダッド、その後は大カイロのベイベルベイとなった。その後この仕事を解任され、統治の支出報告のために宮殿へ招かれた。大宰相キョプルル・メフメド・パシャは、カラ・フスタファ・パシャが(自分の)地位を狙っているのではないかと疑いスルタンや母后と友人であるためにこの野望を成功

させてしまうのではないかと心配した。(p. 91 終わり)

宰相が自分を殺害しようと決意することを恐れたカラ・ムスタファ・パシヤは逃亡し、宰相が亡くなるまで4年間隠れて過ごした。宰相職に就いた息子の命を許し、彼を二度バグダッドのベイレルベイとした。現在彼をフィラリ・ムスタファ・パシヤと呼んでいる。

(p. 91 4段落)

あるものはベイレルベイという肩書きで宮殿を出るとき、スルタンは彼の側に家と側近を形成するのに十分なだけの小姓を与える。そしてこの人物がスルタンから許可を取った後、慣習となっているので、とても大きい内側に銀貨や金貨が詰まった2つの大きな銀の器を宦官長たちへ運ばせ、ひとつを42の数字のアルズ・オダのEの文字が記された側にあるポーチ、もうひとつを同じ部屋のFの文字が記された側にあるポーチにいる小姓たちへ示す。メフテルグループがダヴルを叩き、ズルナやネフィルを鳴らしているときに、ビュクオダの小姓たちはFへ、クチュクオダの小姓たちはEの側に出て行き、宦官長たちは手にある器やお金をポーチから放り投げる。そのとき驚くべきことが起こる。小姓たちはお金の上に突撃し、特に器を得るために殴りあうのである。持ち主が変わった器は最終的には一人のところまで止まる、彼は器を部屋から出して門の前にいる見物人として立っているカフタンルに向かって放る。カフタンルたちは器を投げたものを特定し、闘争が終わった後に彼に返すために受け取り保管する。

(p. 92 1段落)

この間に白人宦官長とともにサライ・カフヤーは、新しいベイレルベイの腕を取り彼を63番の部屋〔Bab-ı Hümayun〕まで連れて行く。そこで宰相のkethüdaが彼を歓迎し宮殿まで馬を連れてくる。彼の側近になるために宮殿から出た小姓たちもスルトンの厩舎の馬に乗る、スルトンの馬丁も彼らに同行する。宰相の宮殿でシパーヒーの間に参入する小姓たちとともに新しいベイレルベイへ3日間にもおよぶ大宴会を行いこのときに小姓たちへkethüdaの管轄の下シパーヒー流のターバンの巻き方を伝授する。ハスオダの小姓たちのうちの一人がベイレルベイではなくシパーヒーとして宮殿から出るときにはベイレルベイと同じ儀式で旅立ちを祝う。お金をつまんだ器を投げる慣習はない。

(p. 92 2段落)

上を赤いブロードやベルベットで覆われ、金で作られた玉座はハスオダにある。エジプトやエルサレム、その他の場所からもたらされたとても尊敬されているいくつかの聖遺物はこの王座の上に結ばれている。(p. 92 終わり)

これらの中で一番重要なものはユスフ(Yusuf)のタッケとファラオのランプである、しかし最も価値があり最上位だと思われているのは、ムハンマドのhırka-i şerifと呼ばれる古い衣服である。この聖遺物は年に1回、食料庫部屋の者たちが4月に特別にこの作業のために集めた露(4月の雨や露は神聖であると信じられている)で洗う、そしてこの奇跡的な価値ある水が小さな壺に加えられイスタンブールの高官たちへ贈るため保管される。この贈り物

を受け取ったものはそれを厳重に保管する、マラリアや他の病気によく効く薬であると信じられているからである。さらに息を引き取った友人を墓での苦痛から救うために口にこの水から一滴を飲ませていることにより魂の抜けた体にさえ効果があると信じている。

(p. 92 3段落)

ハスオダのもの全員の上で権力を持ち彼らを拳骨や首を平手で打つこと、さらには足打ちの刑でもって罰することができるハスオダ長は自分用の小さな部屋をハスオダの中に持っている。しかし足うちの刑の罰はスルタンの特別な命令がないと適用することができない。足うちの刑はトルコではとても普及しており、宰相ですらこの罰を免除されてはおらず(けれどもスルタンが彼をこのように罰しようとする、絞首刑を望む)、広い帝国においてただムフティーとカザスケルのみが任務を執り行うときに示す知識や年齢に適した敬意のためにこの刑罰において少しの特権を得ている。

(p. 93 1段落)

ある部屋から他のところへ、そして最後にハスオダへまで出世した小姓を入れることになる新しい部屋の扉まで連れて来た宦官長は、彼をここで立ち止まらせ首根っこを殴った後腕をとって部屋へと通す。そこで迎えられ部屋の順番付けで最後尾に加えられた小姓は、全ての雑用を押し付けられることになる。

(p. 93 2段落)

32番は、ハスオダの扉の前にある区画である。

宰相やムフティー、2人のカザスケル、reis efendi からなる特別なディワーンをスルタンが格子の後ろから眺める窓は設計図ではGで表されている。これらの職についているものたちは重要な問題に決定を下すためにハスオダへと招かれ、中庭(avlu)の門からではなく、庭園(bahçe)側から入る。時にはスルタン自身がディワーンに参加し決定を提案して全員の意見を聞く。

(p. 93 3段落)

33番は、寵姫たちのハスオダと小姓たちのハスオダの間にあるスルタンの部屋(Hünkar Odası)と呼ばれる部屋である。とても贅沢に設えられた多くの部屋から構成されている。

(p. 93 終わり)

スルタンのベルベットに覆われた羽毛の敷布団を、我々のように木製のベッドの上ではなく石の台の上に広げる。薄い敷布団は綿から作られ上をベルベットで覆われている。我々のものと似た羽毛の敷布団もベルベットで覆われており、長い枕は錦から作られ中には綿がつめられている。スルタンは一日中ベッドの上に座り服を着て寝る習慣がある。燃えるように暑いときには、側に常に2人の寵姫を置きダチョウの羽の団扇で彼を涼しくさせる。スルタンは部屋から黒海へとつながる水の道[ボスポラス海峡]、港、ガラタ、トプハーネ、ウスキュダルなどを眺める。夜眠りに行くと、少しの皺もないシートが広げられ枕元には絹の刺繍が施された小さ枕が置かれている。夏には縹子のベッドカバーが広げられている

が、冬になると繻子のベッドカバーの下にマツテンやクロテンの毛皮を敷きベッドシートと普通の薄い敷布団の間にさらにこの毛皮から作られた別の敷布団を置く。ベッドの上には、上側を天井につながれた壮麗な蚊帳がある。毎晩スルタンが寝床に入る前には部屋に竜涎香やキャラの香りを放つオイルの小さなランプに火を灯す。部屋の中央には 2 つの大きな金の燭台が置かれている。この上で一晩中腕ほどの太さのある蝋燭が燃えている。長いシャツを着て頭には小さいターバンを巻いて寝る。夜は枕元に *ferras* と呼ばれる 2 人の女性が待機する(彼女たちはスルタンの部屋の掃除婦である)。寵姫たちと楽しみたいと思ったときには、男子のハスオダの扉をしっかりと閉め、スルタンが楽しむために全員が綺麗に装った女性たちの部屋の扉を開ける。スルタンは女性たちを見回した後、今夜は誰に名誉を与えるかを決めるとその者へハンカチを放る。その娘はすぐさまひざまずきハンカチを受け取り口付けた後スルタンと眠る。スルタン・イブラヒムはこのハンカチを放る習慣をよく実行した。しかし女性にそれほど夢中にならない現在のスルタンはこの儀式を全く適用せず、望んだときに気に入った寵姫を呼び出してこの願望をより無作法に行う。スルタンがハレムを一周すると、ハレムで力を持っている女性たちやスルタンの恩寵を今まで一番受けていたハセキたちはその日のお気に入りの元に行き、彼女をその恵みゆえに祝福する。寵姫たちへ行われるように挨拶し、完璧なかたちで装い、宝石で飾り立てる。このとき女性の音楽家たちが彼の前で歌を歌い、宦官長が任務についている部屋の扉まで連れて行く。(p. 94 終わり)

宦官長はスルタンへお気に入りのものが来ることを知らせ、命令が出ると中へ通される娘は、スルタンを見るやいなや走り彼の足元でひざまずく。その前にはハمامへ、その後は 38 番で示されていて後で述べる予定の長い部屋(*uzun oda*)へつれられる。性行為は我々のものとかかなり異なっており私の考えでは全く優雅さはない、全く抵抗にあうことなく簡単に感じる事ができる喜びは私たちがこれほど苦勞して到達したのに比べると面白みのないものである。とにかく恐怖の中で育ち目を地面からあげることすらもできない哀れな女性たちが、愛を示すことを知り、男性に好き好んで(自分から)抱きつくのと同様に拒否する権利も持っている私たちの(国の)女性たちが(私たちに)与える素晴らしい喜びを味わうということはどうして知ろうか。スルタンは精神の侵略に対して無知であり愛を単に自然が与えた本能の欲求であると考えている。自分へ愛を打ち明ける男性を一人も知らないこの女性たちの会話がとても賢いものであるとは思えない。そしてフランスの女性たちの最も無教養なものたちでさえ愛について誰よりも多くのことを知っていることや彼女たちへ何年も教師をすることが出来ることを確信している。(p. 93 4 段落)

34 番は寵姫たちの生活している *Uzun oda* である。ここで地位の順番により住んでいる寵姫たちを宦官長は待つ。スルタンと寝た女性はこの部屋へ入り、スルタンの寵姫という肩書きを得る。最初の男の子を生んだ寵姫は、母后となりこの肩書きのために彼女に宝石がちりばめられた王冠がつけられる。もしも息子が王座に着く前に亡くなったら地位を失い

代わりに次男の母が王冠を身につける。前の母后は宮殿から出ることができる、息子が死んだ後は宮廷内の有力者の一人と結婚することもある。このようにただ王位継承者の母のみが王冠をつけ、もっと小さい王子の母親たちは母后の位を与えられない。また彼女たちはただ寵姫とよばれ息子の生まれた順番によりバシュハセキ(başhaseki)や第2ハセキ(ikinci haseki)などの名を得る。娘しか産まなかったものは他の寵姫よりも優位なことは何もない。生まれた娘は王女の位を与えられ7歳や8歳になるやいなや、まだとても幼いにもかかわらずベイレルベイと結婚させられ華やかな結婚式を開き宮殿から出される。この王女たちにはイスタンブルで生活するために宮殿があたえられ、夫も式を行うために必要な経費や支出を避けられない。スルタンへ仕える褒賞として宮殿の外から結婚させられたほかの寵姫たちも王女と呼ぶ。(p. 95 終わり)

ただスルトンの母のみが息子が亡くなった後に結婚できず、余生を旧宮殿に閉じ込められ刑務所で生活するかのよう過ぎす。他の王子の母親もこの宮殿で過ごし、子供に年に2回会うことができる。これは旧宮殿にいる王女たちがラマザン・バイラムとクルバン・バイラムのときに馬車でトプカプ宮殿に連れてこられそこで3日間滞在するからである。スルタンが息子をもうけることなく亡くなると、王位は兄弟へ渡る。新しいスルトンの母がまだ生きてると(たいていはまだ生きているが)旧宮殿から離され息子の側につれてこられ、王冠をつけられて母后とされる。スルタン・イブラヒムの存命中に娘の3人が子供のときに結婚した、このうちのゲヴェルハン王女は今までに5人の夫をもち、最後の夫であるイスマイル・パシャはハンガリーでラーブ峠の戦争で亡くなった。現在王女は大宰相キョプリル(Köprülü)の宰相執事であるギュルジュ・メフメド・パシャという名の6人目の夫へ嫁いだと思われる。王女たちの夫は常に帝国の最も裕福な男たちの中から選ばれる。スルタン・イブラヒムが亡くなった後はこの3人の娘の母は宮殿から出て、今までに4人の夫—最も新しいものはクッベズィーリ(宰相位)やディワーン長のユスフ・パシャをとっかえひっかえにした。(p. 95 1段落)

パシャやベイレルベイは、可能であればこの種の結婚を避ける。このような名誉のため一生懸命になることはなく、無理強いされなければ決して王女たちと結婚はしない。そのため彼女たちが得ようとする金持ちや権力のある男について話題にされているのを聞くやいなや、先述の人物がどの王女と結婚するのかを命じる勅令をスルタンから無理やり引き出すのは王女たちのほうである。男たちはこの勅令に従うことを強要される、そうでなければ首を切られる。そのためこのような命令を受けたものはすぐに結婚式の準備に取り掛からなくてはならない。王女に *ağırlik* と呼ばれる最初の贈り物をした後、彼女に婚礼金、または未払い婚礼金、すなわち3以上5以下、2万~3万エキの前払い婚礼金を払い婚礼の契約をする。一緒になるのは婚約が整い契約が交わされた後である。宦官長は男をイスタンブルの宮殿に長年住んでいた王女の部屋の扉までつれてくる。面と向かい、座った場所から彼を調べた王女は自分の心に従い決断すると立ち上がり、彼を夫として認めること

を明らかにする。そのとき宦官長は男のスリッパを取り扉の上の高いところへ置く、その後彼を王女の部屋に通す。(p. 96 終わり)

花婿は王女の前で地面まで屈み挨拶をした後何歩か下がり礼拝をする。立ったまま手を組み王女が”水を持ってきて”というまで待つ。水が満たされた小さなカップを取り王女の前にひざまずき顔を覆う、銀糸で花の刺繍が施された分厚い結婚式用のペールを開け水を飲ませる。この間に王女の付き添いの女性たちが小さなサイドテーブルに食事の準備をする。食事の席には通常いくつかの鳩のローストとジャムの皿のみが出される。花婿は妻に急いで食べるようお願いする。女性がじらしたり、花婿が隣の部屋で準備させた待機している贈り物を持ってこさせるまでこの願いを何回も断ったりするのが慣わしである。男が宦官長へ合図を送るとすぐさま宦官長たちは贈り物を王女の付き添いの者たちへ渡す、彼女たちも王女へと渡す。そのとき優しくなった王女は立ち上がり彼女を抱えた恋人が自分をテーブルに連れて行き、座った後に恋人がハトを彼女に一口食べさせるのを許す。王女は肉を食べ、彼女も花婿の口へひとかけらのジャムを与えた後に立ち上がり元の場所に戻る。そのとき全員が下がり、結婚式場に入る前にお互いを知り親しくなれるように彼らだけを残す。およそ一時間後に花婿の友人たちが音楽家を連れてくる、楽器の音色を聞く花婿の招待客がいるサロンへ行くことを強制される、同時に女性たちも王女の傍に集まり朝まで楽しむ。この長い不眠の夜の後疲れた王女は高価なベッドに横になる、他のものへ許可を出し年増の女性と2人きりになる。年増の女性は花嫁に行く必要があることを教え、結婚式の晩の結婚の仕事について教授する。彼女へ全てのことについて注意をした後、夫を招き花嫁に言葉で説明したことを実行させるために彼らだけを残す。夫は王女の部屋にゆっくりと入り彼女がベッドで、自分とレスリングをする準備をした状態で見える。上に着ているものを脱いだ後王女の足元へひざまずきベッドカバーを持ち上げ手で足をマッサージしたり愛撫したりする、ベッドの足側から足に敬意を持って口付けし王女の隣に横になる。そのとき女性は夫に口づけをして結婚の幸せを祈る。夫は自分が恋愛慣れした男であるという印象を与え、妻を満足させようと努力する。朝になると招待客たちは花嫁の扉を叩き、夫をハمامへ連れて行く。王女は夫に贈り物としてハمامから帰ってきた後に着るようにと一揃いの香水の香りのする肌着を贈る。(p. 97 終わり)

トルコでは結婚式の翌日を *paça günü* と呼ぶ。なぜなら新郎がハمامから戻ってくるやいなや、そこにいる全員に異なった味付けでされたヒツジの足(*paça*)のシチューが提供され、その後コーヒーが振舞われるからである。式が全て終わると皆自分の仕事に戻る。丸まる一週間で妻に付き添い、心をたっぷり満たすために新郎を快適に過ごさせる。花婿は習慣に従い何か頭にくることがあっても家にとどまり、男の中の男、最も女好きのものであっても、いやになるほどこれほど長い時間を2人きりで過ごしつかれざるを得ない。もちろん私は我々の国の男子について言及しており、有名なエチオピア王の記憶を侮辱しているつもりは全くない。

(p. 96 1段落)

女奴隷の血筋ではなくスルタンの血筋から来た王女の子供は帝国の最高位につくことはできない。なぜなら明らかな権力を得ることによって、ベイレルベイへ与えられる県のシパーヒーの助けを得て野望を満たそうとすることや(人間の大半は生まれながらにしてこの野望を持っている)、支配する県が完全な独立国になることを恐れているからである。反乱や内戦を防ぐために適用されるこの政策は、兄弟殺しを適切だと認めたり兄弟の血で手を汚したりすることに許可を与える方法ほどは残忍で人道に反してはいない。スルタンが兄弟を檻に入れて(兄弟の)絆が決して安全なものと考えることがなかったのに対し、兄弟殺しをオスマン王家は日常の出来事としてみていた。しかしながら囚人は、スルタンの心配事を死ぬまで確実なかたちで無くならせはしない。なぜなら王子が捕虜にでもなると監督の責任のあるものが友人たちを得る可能性があり、彼らを通して兵士や兄の仲間たちの間で有名になりうるからである。このように兵士や市民がスルタンの支配や王自身に不満を持っていると捕虜の王子を頭に担ぎうる。例えば今日のスルタンの兄弟であるスルタン・スレイマンは、帝国全土で皆の支持を得ておりイエニチェリの軍団は彼を守ることを明らかにした。イエニチェリたちはこのようにスルタンである兄が〔王子〕に対して抱いている悪い野望を実現させることを防ぎ、(もしスレイマンを殺してしまったら)王家を相続させる幼い不健康な子以外には相続人はいないにもかかわらず、(スルタンが)様々な方法で何度も殺害しようとしたスレイマンを助けようとしたのだった。(p. 98 1段落)

前述の王女の息子たちには通常日給銀貨 100 枚の衛兵長の仕事が与えられる。これらは宮殿の 2 つの外門にいる護衛兵を指揮し、その権利を得たパシャやベイレルベイに贈られる剣とマントという名の褒賞または賞賛、または受刑者の決定を知らせたり武器を黒のベルベットの袋に入れた手紙を運んだりする義務を負っている。この黒の袋は、懐に金を入れたりあるいは振る舞いから宰相たちに疑いを抱かせたりしたものの処刑を意味する。この伝達係りは護衛兵にとって有益な仕事である。なぜなら贈り物を運ぶ彼らに褒賞を与えており、死刑の勅令を運ぶときはというと絞首刑にあう人物の遺産を持ち去って財産を没収する任務を受けており、面倒事への返答として自分も基本的な分け前をもらっておくことを忘れず、帝国の国庫へは懐に入れた残りの金だけを渡す。(p. 99 1段落)

35 番は、太刀持ちパシャが日中訪問者を確認する仕事を行う部屋である。

36 番は、スルタンや母后がハレムに住む全ての女性たちや黒人宦官とともに礼拝をしに行く宮殿の大モスクである。この王女たちへ天国において特別な場所が分けられているのかどうか私は知らない、しかし他の女性たちは一般的にモスクへ行くことは重要だと考えられておらず、夫たちもこれをする必要のないことを彼女たちに説得するときには、彼女たちはこの世でアッラーを崇拝する必要性を信じるというよりは、確実に本当に天国に行くという願望を持っているのだという。このモスクにいてそこで説教を行いに来るイマームは、宮殿の外に住んでおり彼をスルタンのイマームと呼ぶ。(p. 99 2段落)

37 番は *çuhadarağa* が一日中出仕する部屋である。

38 番は、どの種類よりも小さな鳥を育てる鳥小屋(*Kuşhane*)である。内廷とハレムを結ぶ 2 人の宦官長が護衛をしている門はここにある。スルタン・イブラヒムの治世の終わりの頃に帝国の経験した内乱で、小姓たちは年老いた母后を無理やりこの門から連れ出して数々の辱めを行い、髪の毛を掴み娼婦の様に地面を引きずりまわした後自分の中庭で首を絞めて殺害した。そしてそのとき宮殿にいた女性たちのほぼ全てが略奪すべき戦利品とみなされ、永遠に男に見向きもされなくなるにより作り出された悲観のために身投げをすることになったのだった。建設されたバリケードで威圧し、ハレムの門を壊し、自分たちを長年苦しめてきたその黒人宦官たちの大部分を殺害するとき、どのような喜びを感じたか考えて御覧なさい。(p. 99 3 段落)

39 番は、ハレムの内門である。

40 番はハスオダにあるため池である。スルタン・イブラヒムは燃えるように暑い日には、その当時とても幼かった息子(現在のスルタン)をこのため池に落とした、王子は危うく溺れかけた。もし太刀持ちハセキのメフメド・アーが彼を助けるために池に飛び込まなければ、確実に命が危なかつたらう。音楽家たちは通常この池のほとりに集まる、時にはスルタンを楽しませるために小さな喜劇を演じる。スルタン、ムフティーとともに宰相もここで安らぎを感じる。(p. 100 1 段落)

B は女性たちが乾かすために洗濯物を広げる中庭である。〔女性たちの広場〕

今まで男子の生活していた部屋に関して与えた種類よりも特別な詳細をハレムの部屋のために説明することができない、なぜならそこに関してはそれほどよく知らないからだ。それでも、母后が殺害されたときに略奪の分け前として一人の女性を手に入れ彼女と結婚したシパーヒー長の一人である私の友人が説明したところによると、宮殿にいる女性たちは小姓と同数で部屋に振り分けられている。しかし彼らの鷹匠部屋や鳥小屋の代わりに他の名前がつけられた部屋があり、男子に適用されている位階の原則は彼女たちにも用いられている。(p. 100 2 段落)

宮殿の女奴隷の数は 1200 人ほどである。寵姫は全て自分の女奴隷を所有している。母后のみ常に 400~500 人ほどの女奴隷を有していた。彼女たちは華々しい衣装に身を包みスルタンに自分に恋をさせ、寵姫となることができるもの、さらにその中の一人の寵姫長や長男の母は、そのために母后となりうるために必要な事柄について教育を受ける。この教育は女奴隷たちを宮殿の外でよい人と結婚させるためにも必要である。(p. 100 3 段落)

スルタンは通常寵姫を母后の女奴隷の中から選ぶ。なぜならば宮殿で息子の恋愛に関し利

害関係なく関わり彼に出会うことができる最も美しく、忠誠心や敬意を保障することができる娘を自分の手で差し出すことに一生懸命働く唯一の女性は母后だからである。この娘たちを通して彼女も権力を強め、仕事の支配に参加する許可を与える敬意を守ることを期待している。(p. 100 終わり)

母后はスルタンの楽しみの最大のとりなし人の様にも見えるが、この状態(母后が仕切っていること)はハセキたちも必要に応じて使えるようにと自分の手下として多くの美しい娘を用意しておくことを妨げるものではない。スルタンが自分のことに飽きてしまったならこの女奴隷を寵愛させるようにと夢中になり、彼女たちのパトロンとなることを目指す。このためこの娘たちの全ての目標はスルタンのお気に召すことと、自分を他のものたちよりも愛させるよう努力することから成り立っている。最高位に昇りつめスルタンの愛情を独り占めすることに成功しなかったならば、面倒な方法を使って他の娘をスルタンのお気に入りにさせようとする。この計画が成功したならばスルタンの新しいお気に入りは彼女たちに恩を受けて頼った状態になり、ライバルの寵姫に対してより強く対抗して彼女たちを嫌う可能性を生み出す。(p. 100 4段落)

主人たちに気に入られた女奴隷たちの中で主人たちが最も大切にしたい女性は何の仕事もなくてよい。部屋の掃除や裁縫、刺繍、洗濯のような全ての必要な仕事は他の女奴隷に割り当てられている、さらに仕立屋が切り出して送った小姓の服も彼女たちが縫う。

(p. 101 1段落)

41番は鷹匠部屋である。鷹匠の人数は70人か80人である。バシュ・アーを鷹匠頭といい、補佐官を *ikinci doğancı* と呼ぶ。この者たちはスルタンの鷹の世話をしえさを与える。また夜に中庭を歩く許可は彼らのみが持っている。鷹を眠らさずにいる必要があると、鳥を眠らさないようにと拳の上に乗せて中庭を徘徊する。宮廷にいるこの鷹匠たちは、外ではスルタンがしばしば狩りに出かける近隣で多くの鷹匠を見かける。また最も価値を置かれ、イスタンブール近郊のウスキュダルで一般的に用いられるのは宮殿の鷹匠である。そのとき玉座についていたスルタン・メフメド4世は猛禽類と狩をすることをとても好んでおり、一般的にトルコ人たちは鷹狩を他の全ての種類の狩よりも好んでいる、その理由は彼らの飼っている全ての種類の鳥を教育し管理することにとても長けていたからだ。我々の鷹匠も彼らから学ぶべきことがたくさんあることに疑問の余地は無い。特に鳥を呼ぶために我々が行っているように喉を引き裂くほどに叫ばない。鳥は決して大きくない彼の声をとても遠くから聞きつけて来ることに慣れているのである。(p. 101 2段落)

Hは鷹匠頭が日中滞在する小部屋である。

42番は豪華な絨毯、美しいクッションや貴重な布が設えられた部屋〔*Arzodası*〕である。スルタンは大使をここでもてなす。(p. 101 終わり)

大使をスルタンの御前にもてなすために約束を受けると、そのときイスタンブルにいる全てのイエニチェリをディワーン広場〔Orta Yer;İkinci Avlu〕に集め、外国人たちを華々しく迎える。イエニチェリたちは武器を持たずに中に入り、中庭を囲むポーチの下に整列する。素晴らしい素早さや静けさでもって舞台ごとに俸給をもらう。イエニチェリたちは長たちが全てのお金を分配するまでディワーンハーネの入り口に座っている。大使は町や海岸で生活する。フランス、イギリス、オランダの大使たち、ポーランド帝国、モスクワの大使たちは常に Pera に住む。通常は使節は滞在しておらず必要などきにのみ使節を送ってくるムスリムの首長たちの費用はスルタンの財布から迎える。その外交使節たちはというとイスタンブルに住む。スルタンは一般的に〔御前にもてなされる〕大使を迎えるために多数の çavuş を派遣する。この者たちは一種の武装した伝令係りや位階つき召使いのようなものである。さらに法廷で廷吏を務めたり軍隊で教育係を勤めたりする。大使を歓迎しに行くものたちの先頭を çavuşbaşı が歩く。Çavuşbaşı は大使を御前に案内し、儀礼長の仕事も請け負っている。çavuş は御前に来た人の左側に立ち次官を右側に配置する(トルコでは序列は右よりも左が下位である)。いったんディワーンハーネへ連れてこられた大使を宰相やパシャが迎える。大使は、スルタンの御前に通されるまでトルコ人のベイたちと別の机に着いて、自分や側近の要人たちに御前会議の間で食事を振舞われる。御前に向かうものは命令が出されると1番のバーブ・ヒュマユンへ連れて行かれる。ここでスルタンのシャツに口づけをしに行く大使や側近たちへ服の上に羽織るために一人ずつにカフタンが与えられる。部屋〔Arzoda〕の一角でディヴァーンの上で、クッションの間に座ったスルタンの長いシャツの裾は床についている。大使は地面まで屈みスルタンに挨拶を述べた後シャツの端に口づけをする、スルタンはこの挨拶を受けるとき立ち上がらない。大使は話を立ったまま行い、スルタンの口からは通常“ようこそ。手紙を拝見しよう。宰相があなたに意思を伝えるだろう”という答えの他は得られない。その後スルタンに挨拶をしなくてはならない貴族たちが前が出る。各自の腕をカプジュが抱え、彼らにとっても丁寧に挨拶をさせる。

(p. 101 3段落)

43番は話題の部屋の前にある区画である。この区画は大使が御前に呼ばれるときにのみ宝物庫から持ってこられた高価な家具や美しい絨毯で飾られる。

Cはビュクオダの小姓たちが日に4回礼拝を行うモスクである。

Dは唾者たちが一日中いる小さな区画である。年長者が彼らに唾者言語を上達させるためにここで指導している。

44番は、巻き毛のバルタジュの部屋である。頭から巻き毛を垂らしたこの男たちは、スルタンの小姓たちの中でも最も信頼されているものからなる。人数は100~120人ほどで、付属官殿から連れてこられたものたちの最も屈強なものの中から選ばれる。バシュ・アーは巻き毛のカフヤーである。

(p. 102 1段落)

私の友人の一人が、エディルネ宮から来たときに白人宦官長からこの部屋に入るよう命じられたと述べた。部屋へ入らされるときにカフヤーが隣へ来て彼のベルトを掴み力いっぱいゆすぶった。友人は腰が弱く、そのため自分に示された仕事に適していないことを彼に信じさせるためにこの行動に全く抵抗を見せなかった。このお芝居は望んでいた結果を出し、巻き毛のカフヤーに気に入られずにビュクオダへ送られた。このバルタジュたちの仕事は薪を切って内庭の中庭とハレムの中庭へ運ぶこと、これらの中庭の掃除をすること、黒人宦官長と白人宦官長の命令で見張りをすることである。ハレムの夕食で残ったものを食べる。年に一度宮廷の中庭の赤い斑岩の柱をレモン水でこすって磨く。(p. 103 1段落)

45番はクッベアルトゥ(kubbealti)つまり帝国の最高位のものたちが集うディワーンハーネである。ここで大宰相、カザスケル、クッベやディワーン宰相が他のウレマーたちとともに集まって重要な審問を行う。この裁判は、下位の位のカーディーたちの申請によりもたらされる。あるいは(裁判の)一方が特別な人々であったときには、裁判は直接ディワーンで行われる。ディワーン・ヒュマユンは帝国の唯一絶対の決定機関である。さらに再審裁判所や財務省の役目も果たしている。(p. 103 2段落)

46番は原告や書記、この上級の役所のほかの下位の職についている者たちがいる部屋である。原告といいますが、これはなぜならトルコでは皆自分の裁判を自分で弁護しなくてはいけないからである。弁護士を使わないために、インチキや大喧嘩、さらに支出の大部分を押しえられる。しかし、もしある者が力に頼らず、また自分を守るための勇気を持っていなかったとしたら、親類や近所のものから一人を代理人として指名することができる、そしてディワーンで彼に同行したこの人物は権利を守るために手助けすることができる。(p. 103 終わり)

さらに、トルコ語を喋れない外国人は話を聞きとれるように通訳を使うことができる。この利点は、簡単に目の前の裁判をすぐに処理して判決を下す領事同様、正義を速やかに行わせることである。(p. 103 3段落)

47番はヘルヴァハーネ(Helvahane)つまりスルタンのためにお菓子やシャーベットを作る配膳係と果物係りたちの部屋である。数は100人ほどで、バシュ・アーはhelvacıbaşıである。

48番は、いつもディワーンの日議論が終わった後食事を振舞われるウレマーやイエニチェリたちの肉が料理される宮廷の台所または無料食堂である。およそ160の料理人とその手伝いがいる。長たちの中には、全ての料理を準備する料理長がいる。

49番は、ハスバフチェ(Hasbahçe)の一面である。(p. 104 1段落)

50番はトゥマルハーネ(timarhane)つまり病気になった小姓たちが入れられる病院である。

具合の悪い者たちの頭にハンカチをくくりつけて示し、すぐに病院へ入る許可を与える。健康が回復した後不安がなくなるまでそこに滞在する。患者は白人宦官長が待つ門の前へ2人の新人小姓が連れてきた上部を赤いブロードで覆われた馬車で病院へと運ばれる。小姓たちはこの機会を利用して宮殿の外にいる友人たちに会うことができる。トゥマルハーネへ行く日を前もって知らせていた友人たちは小姓たちの通る道で待機して馬車を引くもの手に何かを握らせてゆっくり行かせるようにする。このようにしてより長い時間対面し、会話をする機会を見つける。(p. 104 2段落)

51 番はトゥマルハーネ長という宦官長の部屋である。

52 番は、小姓たちの洗濯物を洗う ana と呼ばれる老年の女奴隷たちの部屋である。

53 番はハスオダ勤めのものやアルズアーたちの病院である。

54 番は宝物庫と食料庫勤めのものたちの病院である。

55 番はビュクオダの小姓たちの病院である。

56 番は遠征部屋勤めの者たちの病院である。

57 番はクチュクオダの小姓たちの病院である。

58 番は病人や健康回復期の者たちが体を洗うハمامである。

59 番は宦官張たちの病院である。

60 番はトゥマルハーネの門である。(p. 104 3段落)

61 番は、その昔ジュンディたち、つまり小姓たちの訓練について説明したときに言及した騎手たちが滞在していた部屋である。しかし女性以外にまったく興味を示さなかったスルトン・イブラヒムの怠慢の結果もはや宮殿にはまったくジュンディがいなくなってしまった。そしてこの部屋は小姓の部屋とするには小さすぎるため新たに来た新人小姓がここへ入れられている。(p. 105 1段落)

62 番は、イエニチェリの新人小姓の部屋である。宮殿にいる幼年小姓の数は26人である。町へ自由に行くことができるので小姓たちの買い物をしたり、友人へ知らせたい(そして新人小姓に伝えることに成功した)言葉を代わりに伝えたりする。さらに宮殿や台所に生肉を運んだり、前に述べたように病気の小姓を宮殿の病院へ連れて行ったりする。

(p. 105 2段落)

63 番は宮殿の門番によって守られている一番目の大門である。日が昇る一時間前に全てのディワーンのメンバーが馬に乗ってこの門の前に集まりアヤソフィア・ジャミィで朝の礼拝を行った後、驚くほど静かに控えめな態度で2人ずつこの大門をくぐって行く。最後に大宰相がやってきて2人組みで並んでいる集まりの真ん中を通りすぐにクッベ〔ディワーンハーネ〕へ行く。この間 çavuş たちが歓迎して“パシャ様、国家とともに万歳！”とい

って叫ぶ。

(p. 105 3段落)

さて、宮殿の設計図に書かれた全ての番号に関する説明はこのようなものである。今あなたへ小姓たちが帝国で自分たちへ与えられた異なる仕事につくためにどのように教育されているかについて言及しなくてはならない。知性を鍛え育てることを、任命される職で仕事を責任を持って行えるようにするための知識の源を書籍に見出していたので、本を読むことによって行う教育に与えていた重要性について少し述べておこう。(p. 105 4段落)

小姓の教育

小姓たちの最も通常な訓練や実習は、それぞれの知能によって増減するが読書によって学ぶことである。そもそもスルタンも彼らを必要以上に学習させようとするような意図はもっていない。彼らに課された唯一の条件は、書物へとても価値を与えること、特にコーランへ深い敬意を養うことである。ひとりひとりの前にコーランを置き、そして最も無知なものでさえ目をそれから離さないよう強要する。(p. 105 5段落)

だから読書をして学んで進歩することは、これを重要視するものや無知なものと自分を区別する知識を手に入れるほどの熱心さをもった者の意思にかかっている。生まれつきの性質でこの高貴な野望の動機を感じたもの(少数であるが)、部屋でカルファー(友人の指導者)あるいはコーラン読み(魂が平安であるようにわずかなお金を託した人たちのためにコーランを読むコーラン読み)として他のものよりも高い地位へ就く。コーラン読みは1日あたり銀貨2～3枚、カルファーはそれぞれの生徒から年に銀貨200枚をもらう。

(p. 106 1段落)

学問を好みこの仕事で確かに成功したものは学生、つまり哲学や科学に関心を持つものと呼ばれる。けれどもこれらの中から表舞台にすばらしい才能を示す人物が現れるのはとても少ない。なぜなら東方世界の文法、詩、文学の分野を取り扱う主な書物はアラビア語で書かれているからである。この言語の文法を使いこなすことはとても難しいので長い教育が必要である。コーランがアラビア語で書かれていて、法が他の言語に訳すことを禁じていたため何が書いてあるかわからぬままにコーランを読破した後に読まれるほかの書物は *Nasara, Bina, Maksud, İzzi, Merrah* や文法 [ilm-i tasrif] に関したより多くの作品である。その後 *Avamil, Misbah, Ecurrumiyye, cami* や統語法を教えるほかの書物を与えられる。そしてこの方法で言語の基礎法則を学んだ後、ムスリムの信仰やシャリーアを取り扱う書物をトルコ語として説明させる。このとき *Şurutü's-salat, Mukaddime, Kuduri, Sadru'sheria, Mouhekah, Hidaye, Dürer* や *Gurer* などの書物を手に取り、これらについての授業をうける時、ほかのもろもろのことについての説明を聞くことや、宗教の知識の代わりに宗教について教育されることを保障するこれらの書物の意味を暗記することを強

要された。

(p. 106 2段落)

何人かはアラビア語よりもずっと簡単で繊細な言語であるペルシャ語を学ぶ。彼らが読むペルシャ語の書物は *Danisten, Şahidi, Bostan*, や *Hafız* などである。しかし同時に *mülemma*、つまりトルコ語、アラビア語、ペルシャ語をともに使った、装飾的な言語で書かれた、美しく豊かな考えで満たされた散文や、とても優雅な韻文双方の文からなるほかの書物も読む。 *Kırk vezir (Kırk Vezirin Hikayesi)*, *Hümayunname*, *Kelile ve Dimne (Çılgınlıklar ve Masallar)*, *Elf leyal (Bin gece)*, *Seyyid Battal*, *Kahramanname* やその他の物語などである。

(p. 106 3段落)

イスラム法や法学について勉強する者たちの目的は、パシヤやカーディの職を得る水準へ到達することである。宗教的な事柄へ目を向けてシャリーアの教育を受けるものの目標は、地位の収入が大きいので主なスルタンのモスクのイマームに採用されることである。我々の宗教の教会地区で利益を得る目的で他の収益を集めるために仕事に従事する修道院の僧や他の高位の聖職者よりも余計な不便はない。トルコにおいても他の地域においても、現金や簡単に収入を得るのは宗教関係者である。このような地位は自ずと不活発な生活の傾向を生み出すが、この地位にいる人物はその生活を、世俗的な仕事をしている人よりもいとも簡単に感情的な快樂で味付けをするものである。なぜなら世俗の事柄に取り組むものは、財産をためるために味わった苦勞ゆえにお金を使うときにより質素に振舞う。娯楽にお金を使う前に、必需品や仕事に必要なものを充足させることが必要だと感じている。

(p. 107 1段落)

ペルシャ語を学ぶ傾向を示すものは、少なくとも *divan efendileri*、つまりパシヤの秘書官長 (*mektupçusu*) や書記になれるように、トルコ人たちの使う様々な読み書きをよく勉強する。このためにしばしば美しい書物を模写したり、様々な勅令や特権勅令、判決やその他の手紙の書式を必要とときに使えるように、また似たものを書くことができるように、実物の模写をして学んだりする。

(p. 107 2段落)

毎週金曜日、最初の礼拝の後に写字生の作品が点検される。そして美しい筆跡で完璧に書いたものが現れると、簡単に宝物庫や食料庫の秘書つまり全ての小姓の記録簿や出席簿を取るデフテルジになる任命する。この種の仕事の収入はよい。しかし使用される書体がとても多いために、この技術を完璧に得ることはかなり難しい。我々の丸文字、イタリック、*batard* [丸文字とイタリックの中間] などの書体のように、彼らにも約 12 種の書体がある。書き記すものによって適した種類のものを選ぶ。最もよく使われるものは書記文字である。ディワーン、証書、スルタンの勅書、国内通信、検査などのためにそれらのもの全てに固有の特別な書体がある。

(p. 107 3段落)

コーランを全て暗記するよう努力し、苦勞の末にこれを成し遂げたものをハーフズ(hafiz)、つまりコーランを記憶しているものと呼ばれる。この人物はトルコ人の間ではとても価値を与えられ、とても尊敬される。コーランの神聖さを認めているために、主なモスクのうちのひとつで働いているハーフズたちはあまり権力を持っていないくとも人々の間では聖人のように思われている。(p. 107 4段落)

小姓たちの遊びと娯楽

宮殿で紐でつながれた犬の様に仕えることを強制される小姓たちは、3日間続く2つの祭りの間や重要な町あるいは要塞を手に入れたときに制定された国民のお祝い事の際には、自由に遊ぶこと、会話すること、歌うこと、ふざけあうこと、全ての部屋を訪れることや思いつく限りの悪ふざけで楽しむ許可を与えられている。多くのものはトゥラの遊びをしながら、つまり手にハンカチを巻きつけてやわらかくして楽しむ。あるものは毛皮の毛のある面を逆さにして熊、ぬいぐるみに興じる。犬やそれに似たあらゆる動物の見た目を真似る。もっと真面目な者たちはチェスや馬とび、バックギャモン、*dokurcun* や *minkale* のような地味で頭を使う遊びをする。*Minkale* 遊びはトルコ以外の場所では全く見かけることはなかった。上に6つの穴が開いたボードで遊ぶ。全ての穴へ12個の小さな貝殻を置く。ゲームを始めた者に付属する3つの穴のうちのひとつにある *kabuk* をとって、これらの全てを一つ一つ全ての穴へ置く。二人目のプレイヤーも穴のうちのひとつを空にする、手元にある最期の貝殻を置いた穴にある貝殻の数に対して穴にあるものと同じであれば、それぞれの二つの穴にある全ての貝殻を集める。ゲームの最後に最も高得点を出したチームが勝利する。博打は厳しく禁止され、トルコ人たちは娯楽目的でしかゲームをできない。

(p. 108 1段落)

この娯楽では小姓たちがコーヒーやあらゆる種類のシャーベットを飲むことに許可を与えられている。しかしワインや生命の水、煙草は禁止されている。煙草はシャリーアではなくスルタンの勅令によって禁止されている、しかしこの禁止を破ったもの、見境なく振る舞い堂々と煙草を吸ったものは死刑にされる。何人かは大麻または *hannebaume* という名の一のアヘンを吸う、これも彼らを愚か者にし、混乱した精神で作り出した様々な映像で愉快にさせる。憂鬱な状態で煙草を吸うものも、棒から流れる煙の作り出す様々な雲や形の眺めに一種の楽しみを見出す。

(p. 108 2段落)

スルタンが周遊に行くために馬や小船に乗ったときには、小姓たちが中庭でボール遊びをする許可が与えられる慣わしである。(p. 108 終わり)

しかし部屋の小姓は別の部屋の者たちと一緒に集まるといった危険を冒すことはできず、他の部屋に友人や知人がいる場合は、唯一できることは彼らと手話で会話することであった。

皆この種の意味疎通を多かれ少なかれ知っている。このやり取りの方法は宮殿ではとても広く広まっている。ハスオダの者たちも、通常望みを手の動きや合図のみで命じるスルタンの御前において自分たちの間で会話をするためにこの手話を完璧に知ることが必要である。

(p. 108 3段落)

静寂と慎み深さ。騒々しいものへの処罰。

友人たちと喧嘩をしたものには厳しい罰が与えられるので、小姓たちの間には慎み深さと穏やかさが広がっている。一般的にとっても優しい言葉遣いで相互の友情の中で会話をする。お互いに *kardeşim* や *canım* といって話す。いつでも会話をする自由がないので、手に本や文書を持ち静かに読んでいる、この状態は生きている人間というよりも銅像に見える。

(p. 109 1段落)

仲間内で口論が起こった場合、喧嘩をしたものは正しいか間違っているかを調べることもなくとても厳しく罰せられる。彼らを喧嘩の始まりに、怒りが増大する前に止めなかったという理由で近くにいたものたちも罰を与えられる。喧嘩をしたものの傍にいた少なくとも 20 人が鞭打ちにあうためこの罰は行列の鞭打ちと呼ばれる。

(p. 109 2段落)

小姓たちはどれほど怒りを感じたとしても、またどれほど憎しみを感じる出来事が起こったとしても、手元には小型ナイフといくつかの切れ味の悪い剃刀しかないため決して殴り合い以上には発展しない。

(p. 109 3段落)

スルタン・イブラヒムの治世で喧嘩が起こったとき小型ナイフを刺し仲間の目玉を抉り出した小姓は鞭打ち 1000 回の刑にあい、喧嘩の場に居合わせた大勢の者たちも罰金刑を与えられた。攻撃の被害を受けた目玉の補償のために銀貨 5000 枚の支払いが課せられたときに、近くにいた者たちは一人当たり銀貨 200 枚の罰金もこの賠償に加えられた。ムラド 4 世の時代にはナイフで部屋の友人を殺害したビュユクオダの者の頭を切り落としそしてビュユクオダのものは部屋の刑に処せられた。つまり一人の人物が犯した罪の罰を全員が受けた。数日間乾いたパンしか口にしておらず、宦官長たちが彼らを部屋で地面に散らばった小さなガラスの欠片の上を裸足で歩かせたためにかかとはひどく裂けいたるところが血だらけになった、この間四方から鞭が振り下ろされた。

(p. 109 4段落)

貴重なものが無くなったときには盗まれたものを出させるためにこの種の罰が与えられる、そして盗人を見つけ盗んだものを返すまで部屋のもの全員がこの出来事の責任を負う。しかし小さな価値のないものを盗んだときには泥棒にはとても軽い罰が与えられている一方、気に入ったものを簡単に手に入れたものよりも、備品をよく守ることができなかったものが罰せられる。

(p. 110 1段落)

トルコ人のほかの習慣について述べることや私が学んだ特別な知識をあなたに伝えるのは私がフランスに戻ってからにいたしましょう。さてわが主人よ、目下可能な限りの宮殿の全ての描写をすることができたように思う。この描写で静けさが教えられた Pisagor の学校や優れた教育と厳しい罰で慎み深さと知識が教えられた Lakedaimon の学校、温和や慎み深さを守ること、従順さや支配する才能を得ることに価値を与えた Sparta の学校などのイメージと異なることにお気づきになるでしょう。ここにはとても整備され均整の取れた形で組織された、全く途切れることのない地位へつけられた数々の職種や地位を与えられた構造があるといえます。このため宮殿でも、外部でも暴動が嫌われており法律はとても厳しい。この大帝国の全ての支配が宮殿で与えられる教育に縛られている。そこでは国民の幸運は等しく、皆がただ美德と罪によってのみ際立たされる。そこでは人種の誉れ高さによる誇りは何の役にも立たない。ただ美德によってのみ他のものたちの上に立つことができる。褒美は正当な権利を持つものへ与えられる。大半はアルバニア人、ハンガリー人、ボスニア人、ブルガリア人、チェスケス人、エチオピア人、グルジア人やトルコ人の様な多くの異なった地域の下層の人々や下層出身の、多数の貧しい人々の間ではありふれた美德でさえも簡単に違いが出る。彼らはとても反抗的で服従しない人々であり、思想や罰を必要に応じて受け入れそれを利用するのではなく、好みに従い全ての決まりに絶対に抵抗し、本音を偽り我慢するよりもどれほど激しくとも棒打ちの刑になることを選ぶ。ただ権力を得ると、本音に従うよりも、不正になり非道徳になりけちになり残酷になってしまう。従順になるものの数は従わなかったものよりもずっと少ない、そしてこの乱暴な人々の民族の魂をやわらかくして慎ましくさせるのは大変困難である。(p. 110 終わり)

イタリア人、フランス人、スペイン人、ポルトガル人、ドイツ人、オランダ人、イギリス人やポーランド人のように誉れ高く穏やかな性質の国からきたものとはいうと、これほど乱暴で残酷な振る舞いに耐え切れず短期間で死ぬか、あるいはトルコ人には犠牲の羊を少し太らせてから切るということを知っているほど賢く判断力を持っているので、ただのシパーヒーの地位に満足して一刻も早くに宮殿から出ることを希望する。なぜなら裕福になり権力を得た者や、とても上級の位へ登りスルタンや宰相の欲を膨らませるほど大きな富を得たものは命をより危険に晒すからである。(p. 110 1段落)

わが主人よ、どうかこの説明が長いことをお許しください。そして望まずにかかってしまった病気に受け入れて辛抱強く読んでください。もし私があなたの命令にきちんと従うことができていなかったならば、あなたに誓った友情にふさわしくないと、慎ましい形でどれほど心をこめてあなたの僕として働いているかを示すことができる唯一の機会を逃してしまった絶望を感じることでありましょう。

[Aşağıda kurşun kalemlerle;]

GIRARDIN

(p. 111 1 段落)